

■アジア

■シンガポール

美しきものは永遠の喜び

ハミマ・ピンティ・アブ
(教育グループ)



キーツの詩：美しきものは永遠の喜び

その素晴らしきは増しゆき
絶えることなく
われらが木陰を静寂に包み
眠りを満たすは
甘き夢 すこやかさ 静かなる
息づかい

そしてそれは今回の日本への旅を表そうとする私の気持ちでもある—永遠の喜びとして存在し続けるであろう美しいもの。私がこの旅—言葉、習慣、文化、食物のすべてが異なる国への旅—について当初抱いていた心配や疑いや不安がどんなものであったにせよ、日本へ着いてからというもの、それらは徐々に、貴重な知識、愉快な時、比類のない絆、そして何より、日本と日本人に対する穏やかだが確固とした理解へと姿を変えていったのである。

私は確かに日本で多くの美しいものを発見した。まず、システムのなかの美。それは新幹線に象徴されるように、速くて、効率的で、進歩的で、活力に満ちており、いつでも地域に益をもたらす。これは、整備されたインフラや素晴らしい教育制度のなかにも見いだされる。来日前でも日本の塾のことや学生の自殺率の高さのことは知っていた。

しかし、岐阜の合宿セミナーでの討論や、岡山での学校訪問を通じて、私はシステムのなかにバランスがあることに気がついた。学校では学力が重視されてはいるけれど、生徒各人の全人的な発達には決してないがしろにされていない。思考や学習における創造力や独立心を養うための最善の努力は私たちが見習うべき面である。

私は建築物のなかにも美を発見した。瀬戸大橋、神社仏閣や古い建物—装飾的で、歴史に彩られ、力強く、威厳に満ちて建っている。私たちにとって、古風で趣のある道や建物の多い倉敷市は心の中で特別な場所を占めているが、私個人としては、モネの「睡蓮」やピカソの「鳥籠」などを収蔵する大原美術館に心を奪われた。

しかし私は日本人のなかにある美こそが最も印象的だと思う。お会いしたすべての方が親切で、思いやりがあり、寛大だった。団体の方々、コーディネーターたち、参加青年の皆さん、そして特に、私たちをホームステイさせてくださったホストファミリーの皆さん。ホストファミリーは私たちを家族の一員として非常に温かく受け入れてくださったので、私たちのほとんどはホームステイ後ホームシックになったほどだった。これによって私たちは心と心のコミュニケーションにはどのような特別な言葉もいらないのだということを再認識したのだった。お互いに知り合いたいという純粋な願いは言葉の障壁を超えるのである。

私はまた、各訪問先での質疑応答や、特に岐阜での合宿セミナーで示されたような率直で正直な考え方、情報、意見の交換に非常に感謝している。しかし何にも増して、岡山で学校訪問した私たちを歌やダンスで温かく歓迎してくれた生徒たちの可愛いなかにある真剣な表情に心動かされ、彼らと交流するための時間がもっとあればいいのと思った。私たちはまた、広島の人々の驚くべき回復力や尊厳のなかにも美を見いだした。

そして日本の風景の美のなかにある言い知れな

い静けさをも私は発見した。美しい山々や近代的な高層ビルに並んで存在する田んぼ。富士山の荘厳な山頂を初めて目にしたときに思わずもらしたため息を私たちはいつまでも忘れないだろう。

でも私個人としては下呂の曲がりくねった川が大好きになってしまった。毎朝、川のせせらぎや鳥のさえずりや、自然の美に促されてバルコニーで歌う友の甘い声で目覚めることができるなんて素敵なことだろう。

もし美が見る者の目のなかに存在するのなら、この見る者は魅了されており、時として圧倒されてさえる。

フィーリングス

リー・ワイ・チュン・ブレナン
(社会開発グループ)



30日間の日本滞在中に味わった素晴らしい体験について、語りたことはたくさんある。しかし、考えれば考えるほど、書こうとすればするほど、私の思い出はこの一言に尽きるといった気持ちが強くなっていく。その言葉とは……フィーリングス(さまざまな想い)。

新たに知り合った日本の友人との交流にも本当にさまざまな想いがあった。文化、経済についての話、あるいは単なる日常会話のなかにも、温かさと誠実さが感じられ、それが私たちの体験をより一層意義深く、楽しいものにしてくれた。この一瞬、一瞬、新しい友人と出会ううちに、この友情がまぎれもなく長く、長く続いていくことをにわかには確信したのである。この想いは、友人

のことを思い出すたびに、私の心の中で鳴り響き続ける感動となって残っている。

私の同胞たちも皆、同じように感じているに違いない。私たちが日本での経験から得たものは、ただ単なる友情だけではなく、故国シンガポールに持ち帰ることのできる大切な想いと甘美な思い出だった。

そこで、日本のすべての友人に対し、「青年招へい事業」シンガポール社会開発グループはこの詩を捧げたいと思います。題して「我が友、我が愛」です。

この地に着いた日、私たちが出会った日
あの日の想いは決して忘れない
あなたの美しい微笑み、甘い声
遠い夢へと私を誘う

過ぎた日々、共に過ごした時
忘れ得ることのない思い出
あなたのたおやかさ、そして優しさ
私の想いを遠く誘う

サヨナラ、我が友、我が愛
素晴らしい時、今や別れの時
共に過ごした時は一瞬
けれど永久に忘れはしない

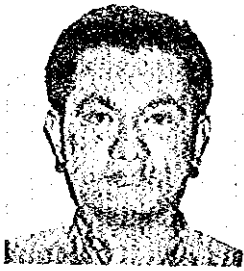
触れ合った時、出会った時
いつまでもいとおいしいこの想い
時の砂は流れていく、想いはいつもそこにある
私の想いは遠く漂う

今や別れの時、いとおいしい時
心に持ちつづける甘美な思い出
あなたを忘れない、いつまでも愛し続ける
あなたをいつも想っている

友よ、温かい握手と心からの愛をありがとう。
またお会いする日まで、アイシテイマス。

日本の思い出

ワン・リヤル
(経済Bグループ)



成田空港に着いたとき、私たちは1カ月のプログラムを前にして興奮していた。2回の週末を利用して行われたシンガポールでのオリエンテーションは、日本で待ち受けているプログラムの幕開けであった。

有能で礼儀正しく真面目な日本人像はよく知られているところであるが、あまりよく知られていない面は、日本人の温かさや親切心や若い世代の変化する価値観である。若い世代の日本人たちに会えるという期待と願望は、合宿セミナーで実現し、それは特別な思い出深い経験となった。同世代の日本人と交流の機会は楽しく、また目を開かせるものであった。

もちろん富山でのプログラムは私たちの心の中の特別な場所を占めている。企業や工場見学などを通じ富山の経済について十分な知識を得ることができた。とりわけ、富山の人々の親切心や温かさや文化の豊かさに私たちは感銘をうけた。また、見学旅行は一瞬のうちに終わってしまった。京都や広島・宮島のような風光明媚な場所は立ち去りがたいところであった。

この1カ月のプログラムで商業ベースの旅行ツアーでは見いだすことのできない日本文化へ認識を深めることができた。実像の日本について学ぶ

特別な機会を与えてくれた。

日本人は2000年にわたる歴史・伝統・文化に育まれた豊かな国民である。伝統的な価値観が変化しているこの時代に、より多くの日本人と交流するより多くの機会がもてたらもっと興味深いものになっただろう。

私たちのために献身的に便宜を図ってくれた有能なJICAのスタッフの存在によって、このプログラムはより充実したものになった。

シンガポールに帰国した後も、日本とシンガポール両国のより良い理解や、さらなる結びつきを強めるためにこのプログラムが継続されることを希望する。

日本体験記

アン・ウィルソン
ホー・チャイ・テック
(経済A1グループ)

東京エクスプレス

1996年6月20日、20人のシンガポール青年が成田空港に到着した。1カ月にわたる日本滞在中に何が得られるのか、その時点では分からなかった。私たちは意欲満々で、その後まさに忘れがたい体験を積むことになるのであった。

体験的日本語学習と講義

「体験的日本語学習」は、私たちが日本語の練習をするのに、効果的な方法である。ボランティアの方々には、根気よく日本語を教えてくれ、またあちらこちら案内してくれた。共通プログラムの講義も興味深く、いろいろなことがよく分かった。菊地靖教授の「日本人の意識と文化」が、とりわけ興味深かった。

都内施設見学

江戸東京博物館、武道館、JETRO、人事院、大井火力発電所などを訪れた。武道館のスタッフ、火力発電所のスタッフが心配りのある歓迎をしてくださり、感動した。人事院では率直な講義から得るものが多かった。

合宿セミナー

合宿セミナーは、最も期待していたものの一つだった。ディスカッションやゲームや自由時間の交流を通じて、友情が芽生えたのである。唯一残念なことは、全員と知り合いになるには、時間が短すぎたことである。私たちの友情の縮図は、シンガポール人と日本人の二人組が協力して作曲した歌に、いみじくも反映されている。合作「夢の海」は合宿セミナー中に私たちが抱いた、期待、安らぎ、連帯、希望を捉え、つづったものである。

広島

多くの私たちにとって、広島とはかつて跡形もなく破壊された都市ということである。私たちの不安は、新幹線で広島に近づくにつれ高まっていた。しかし、駅で受けた地方協力団体の方々からの温かい出迎えは、すべての不安を消し飛ばした。私たちが快適に楽しく過ごせるように準備が整えられていた。

庄原市

庄原は、山地の多い緑豊かな地と映った。市長はじめ市役所の方々に温かく迎えられて楽しい滞在の日々が始まった。市民は限りない心の広さと款待の心を示してくれ、私たちは感動し、感謝している。

地方施設見学

数々の訪問先のうち忘れがたいところは、永末小学校とマツダの自動車試験場である。小学生の

無邪気な顔を見ていると、自分たちの子供時代のことが思い出された。一緒に歌ったり、踊ったり、ゲームをしながら、子供時代を追体験していた。マツダでは、高速走行体験の機会が与えられた者もいた。自動車使用者の安全を確保するために建設された総合テストコースには感嘆した。

ホームステイ

庄原滞在中のハイライトであった。私たちは不安な気持ちでいたために、初めてホストファミリーに会ったときは緊張していたが、すぐにその緊張はほぐれた。言葉の問題はあったが、身振りや、辞書や通訳の助けを借りたり、また自分たちのわずかな日本語を使って、意思疎通を図った。ホームステイから帰って来たときには、全員が満足しており、心豊かになっていた。永遠の友情への道が開かれたのだ。

平和記念公園と原爆資料館

原爆犠牲者のありさまに大きなショックを覚えた。広島の人々の経験した苦しみは言葉では言い表せない。しかし、最も心を打ったのは、平和と核兵器廃絶に向けて戦う広島の人々の決意の固さであった。世界平和と諸外国との友好関係を全市民が求めていることは間違いない。

結論

この1カ月の日本滞在は、素晴らしい思い出と大切な友情—お金では買うことのできない贈り物—を私たちに残してくれた。この贈り物は胸深く大切にしていきたい。プログラムに参加する機会を与えていただき感謝している。

日本のさまざまな顔

経済A2グループ全員 (経済A2グループ)

はじめに

私たちの多くは日本といえば、エキサイティングで複雑なさまざまなイメージを思い浮かべます。日本は空手のような武道から、華道、茶道といった洗練された文化まで、伝統的な芸術を育んできました。また一方で、日本は世界経済の指導者です。このたびJICA主催の青年招へい事業により、私たちは日本を直接に経験する機会を与えられました。

経済

私たちは日本経済の展望について、優秀な学者、政府関係者、エコノミストから講義を受けました。これらの講義により、日本経済の過去と未来の概要を知ることができました。日本のバブル経済と将来の展望の講義からは、多くの貴重なアイデアを得ることができました。シンガポールは今、先進国の仲間入りをしようとしているところです。日本の経験から学ぶことはきわめて重要です。

また、日産ディーゼル、ソニー・メディアワールド、大正製薬などの企業を訪れましたが、「百聞は一見にしかず」の諺どおりでした。私たちは、その革新的技術、福祉重視の経営、従業員の仕事への誇りに感銘を受けました。私たちは実際に、日本経済の成功は偶然ではないことを理解しました。確固たる決意と絶えることのない革命的精神が、日本経済に奇跡をもたらしたのです。

文化

私たちの日本文化の理解は、日本の歴史、文化と社会構造の講義によってさらに深まりました。武道館、江戸東京博物館、ならびに他の史跡への

訪問は、私たちのこの分野への関心をますます高めました。実際に和紙や友禅染めのハンカチを作ったり、書道をしたりといった経験は、学ぶ過程をいっそう楽しいものにしてくれました。

急速な近代化にもかかわらず、日本は文化・伝統を守ることに成功しています。歴史の短い国から来た私たちは、今日の日本において、現代と歴史が融和していることに感動しました。

交流

1カ月にわたるプログラムのハイライトのひとつは相模湖での合宿セミナーでした。言葉の壁があるために、当初は日本青年の人たちとうまく議論できるだろうかと心配していました。ところが、意見交換に対し共に非常に熱心であったせいか、当初の心配はしだいに消え去り、とてもうまくコミュニケーションをとることができたのです。この2日間、シンガポール青年と日本青年の交流を図る数多くのプログラムがありました。バレーボールの試合に始まり、食事、OFURO (お風呂)、FUTON (布団) で寝ることなど、皆それぞれユニークな体験をして、またそれが友情を育みました。特に、私たちは日本の新しい友人たちの気持ちの温かさに感激しました。彼らは私たちの相模湖滞在のためにいろいろと準備をしていてくれましたが、それがとても労力を要したであろうことは間違いありません。

もう一つのハイライトは埼玉県でのホームステイです。私たちは日本人家族の方々と一緒に生活し、その生活様式を体験するという特別な機会を与えられました。私たちのホストファミリーは、とても親切に、心と家とを私たちのために開いてくれました。私たちはこのホームステイの大切な思い出をシンガポールまで持ち帰ります。

終わりに

日本で30日間を過ごし、日本の文化や経済発展

について学び、生き生きとした日本観をたずさえて、いよいよシンガポールに帰ります。私たちは日本政府がこの魅力的な国のさまざまな面について学ぶ機会を与えてくださったことに対して感謝しております。このプログラムを通して、私たちは単なる旅行者の視点を超えて日本を見ることができ、日本人の日常生活を理解することができるようになりました。

日本の774時間

ミシェル・アン・ゴー・アイリン
(ASEAN混成 経済3グループ)



日本での30日間の滞在を振り返るとき、私の最も大切な思い出は親しくなった友達です。1カ月前は他の青年たちとこのような固い友情が育ち、そのために帰国時に別れがこんなに悲しいものになるとは私は想像もしませんでした。常に考えていたことは、一つの出会いは、会話が始まる以前に新しい友人を見いだせるという思いで、この旅で私の信念が間違いではなかったことが証明されて、何人かの生涯の友人に出会えたことをうれしく思っています。

1カ月は今となっては短く思えて、プログラム日程の最後の日になりました。けれど、目覚めている間中ずっと同じグループとともに過ごしてきたと考えると、実際の時間は、とても多くなります。友人と私は、時間を大切に過ごしました。新宿に出かけたり、一緒に洗濯をしたり、夜中に話し込んだり、笑ったりしました。恐らく心の片隅で、時計がいつも時を刻んでいて、“たった1カ月

だけなのよ”と告げていたのでしょう。合宿セミナーで出会った日本の友人たちは皆素晴らしく、わずか3日間一緒に過ごただけで、ASEAN諸国の青年の多くがつらい別れを体験しました。3日間の10倍の期間を共に過ごした私たちの別れがどんなにつらいものになるか想像してみてください。

私が出会ったすべての人々、特に経済3のグループ、私たちのコーディネーターである雅子さん、道子さんと古賀さんに、ありがとうの言葉だけでは言い尽くせないほど感謝をしています。そしてグループの仲間たちへ、たくさんの思い出をありがとう！ 私はあなたたちを決して忘れないでしょう。

■アジア

■タイ

コイノニア(学園)で感動したこと

ウェーチャコーン・ブンミー
(教育グループ)



私は、北海道のセントラルシティである札幌を初夏のある朝訪れた。ここは、「日出づる国」の美しい都市のひとつだろうと思った。私と仲間6人、コーディネーター、通訳のピライパンさんに乗せた40人乗りのリムジンバスは、ある道路際に停車した。私たちは、コーディネーターの合図で下車した。

私たちの前には、大きな木造のあちこち建て増しされた2階家が現れた。13年経つこの建物を家主は学園に寄贈したという。参考資料からもこの学園に称賛を覚えていたので、建物を目にしたときは胸が高鳴り、施設に足を踏み入れたときは、心に思いがこみ上げ、言葉が出なかった。

コイノニア学園は、札幌のクリスチャン教会の支援で約4年前に設立された。学園というよりは、私に言わせれば、小児精神治療所のほうがふさわしい。というのは、ここの子供たちは、どの子も精神を病んでいる。たとえば、学校でのいじめは、日本の教育界で最も問題になっている。知恵遅れの子、親からの期待に潰されている子、あるいは、仕事に忙しく親の関心が薄い子等の問題もある。経済発展に人の心は必ずしもついていけないものではないと痛感した。学園長の板東資郎氏は、園内を案内しながら説明してくれた。

見学中にくすんだ目つきの約13歳位の少女に私

の目は止まった。知恵遅れのようにであった。少女は私たちを興味深く見つめていた。彼女はここで学んでいる10人のうちの一人だった。私たちが見学する所々に彼女は隠れるようにしてついて回った。遂に板東先生が、私たちは青年招へい事業に参加したタイの青年であることを彼女に告げた。板東先生の言葉が終わるなり、少女は安心したように笑みを浮かべた。彼女の笑みは、私の胸をいっばいにした。彼女の笑みは、彼女がこの世から忘れられていないという喜びと、遠方からの新しい友ができた喜びを表していた。

彼女もこの国が抱える問題のひとつで、国が一体となり解決していく問題であり、ひいては子供の問題は世界レベルの問題である。コイノニア学園は、社会で問題に直面している子供たちを勇気づけ、社会復帰をさせる一例である。これらの子供たちも国の将来であることに変わりはなく、誰かが欠けている部分を持っている者を補うのは当然ではないか。私の出会った少女にも、心の安らぐ日々がきつとくるように祈りたい。

コイノニア学園の子供たちには、個々人の勉強でかなり自由が与えられている。ここは、彼らが今まで受けてきた圧力から解放されるよう努力している。他校のようなカリキュラムに沿った勉強でなく、音楽、植物栽培、遠足などの共同作業活動を通じて、子供たちの精神育成に努めている。私たちがここを去る前に板東先生が言われたことがとても印象的だった。子供たちは自分でここを去る時を決める、今までにもう何人の子供たちがここを去り、社会で楽しく過ごしている。この学園がここに来るすべての子供たちの助けになるわけではないが、多くの子供たちの助けになっている。

5人の子供たちと昼食を共にし、その後は、折り紙をして過ごした。子供たちの顔には常に笑みがありとても楽しんでた。ここのスタッフは、みなボランティアで奉仕精神に富んでいた。この

世にこんな学校がたくさんあれば、子供の問題もこの世から減っていきだろろうと思った。

夕方近くに、コイノニア学園を去った。先生、スタッフ、子供たちが名残惜しそうに駅まで送ってくれた。さよならと言う声があたり一面に響いた。電車がゆっくりと進むにつれ見送りの子供たちの手を振る姿が遠ざかって行った。子供たちの見送りの姿が目に焼きついている。私はここを日の出づる国の感動の学園と呼び、一生忘れることはないであろう。

思い出の30日間

社会開発グループ全員 (社会開発グループ)

まず始めに、「青年招へい事業」に参加し多大なるご好意を受けましたことを、社会開発グループ一同はJICAに対し、厚くお礼申し上げたいと思います。私たちはこのプログラムに参加し、多くのことを学びました。なかでも岡山県青年館、旭町青年団、その他関係者の皆様による素晴らしい協調と円滑な仕事ぶりには、とても感銘を受けました。さらに参加青年との間に構築された新たな友情と相互理解は、私たちにとって何物にも代えがたい宝物となりました。

一番印象に残ったホームステイは、さすがにこのプログラムのハイライトだけあって、爽り多いものでした。寝食を共にし語り合うことで、日本人の文化、習慣を知ることができとても有意義でした。私達をわが子のように慈しんでくださったホストファミリーの方々には心から感謝しています。また、合宿セミナーでの日本青年との意見交換では、若者の価値観、ライフスタイルなどを知ることができました。これまでも見たり、聞いたり、読んだりして日本について知ってはいたものの、このプログラムに参加し、体験しなけれ

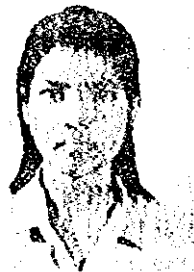
ば分からないものばかりでした。そういった意味からもこのプログラムは、将来を担う青年のこれからの責務や、また自己形成、ひいてはタイ国の発展にいたるまでに参考になるものでした。

私たちはそれぞれ違う職場から参加しましたので、グループを編成するために自己調整をし、日本での共同生活に備えました。日本滞在中に培った友情の素晴らしさに、その成果を窺い知ることができます。

ホストファミリーや交流青年との感動的な日々、学習した数々の経験は、私たちの胸を熱く満たし、新しい思い出のページを飾ってくれるでしょう。関係者の皆様に重ねてお礼申し上げます。

心に刻んだ1カ月

ドゥアンダーオ・ルーガン (農業グループ)



5時間の空の旅

友人、家族と遠く離れてやって来た
生あるものを育む黄金の斧、タイの地を離れ
土の匂いで東京へ着いたことを知る
ホリデイ・イン メトロポリタン
JICAのプログラムで忙しい日々
1週間のセミナーとツアー
毎日、消費されるもの、金
女学生たちのスカートの短さ
毎日、目をよぎる光景
さらにこの国の女性たちの不思議
ニコチンや煙を吸い込むことを恐れないのだ
深呼吸する間もないほど

その異質さにとまどう
 東京の人の暮らし
 脇目もふらず急ぎ足でせかせか歩く習性
 まるでロボットのように
 壊れた機械みたいに休むことを知らず、振り返りもしない
 時間に正確であることが最も大事
 約束や時間に遅れることは最も問題
 食事もおだ 生ではものを食べない
 オレンジジュースのすごく苦いこと
 食料はたくさん溢れている
 常にどこの冷蔵庫にもたくさん詰まって売られている
 ほとんどすべてが機械を通り段ボールに詰められ、自然のままのものは少ない
 馴染めなかった
 だってタイでは果物、野菜、豚に魚は天然のままを食べる
 自然は手を加えられ化粧される
 それが売られ、また受け入れられる、例外なく
 欠乏しないために思うように技術を開発し
 それが何百万円しても払って快適に暮らす
 研究開発、誇り高きパナソニック
 リモート・コントロール製品の販売
 ボタンを押すだけで激変する生活
 アインシュタインのように、核開発研究
 大都市東京から郊外へ
 新幹線に乗って広島へ行った
 本当に速い どんどん離れていく
 すごいなあ 本当にすごい
 核爆弾の被害の爪痕に胸が痛む
 ああ愛する人、人の重い業、言葉もない
 戦争の害悪、無差別な破壊
 覚えておかねば、いかなる戦争も良くないことを
 古都・京都に着いた
 古い伝統文化を今に残す

後世のために大切に保護され
 古い習慣、文化、生活を見せてくれる
 目的が観光のためとしても価値は高い
 それはおそらく対のもの、羨ましい限り
 古いもの新しいものの美しい混在
 興味深い都市計画に見る文明
 日本人のよく言う言葉
 “我々は日本を代表して……”
 強く、深く、古くから
 この国土と国家に日本人の心は結ばれているのだ
 美しい心を持ち悪を嫌う
 その血に綿々と流れ続けてきたのであろう
 神道、キリスト教、仏教と宗教にかかわらず
 人間らしく生きることを大切に
 きめ細かくしとやかなその心に触れることができる
 素晴らしく磨かれたそのマナー
 道路での交通
 人が歩いてくる、車は優しくその道を譲る
 整然と行列に並ぶ人の姿
 ゴミを見つければきちんと所定のごみ箱に入れ
 ファッションを競ったり争ったりしない
 車、服、色や形がほとんど変わらないのだ
 だから平等で階級の差がないのだろう
 自信をもち創造的である
 現在の暮らしのなかに、その広く長い目的意識
 とヴィジョンを持ち常に前進する
 農業協同組合はその一つの良い典型
 皆の生活の向上と幸せを考える
 製品は新鮮でよどみなく提供され
 消費者の幸せも考慮されている
 素晴らしいサービス精神
 外国の人間にもすぐそれは分かる
 この国の標識の素晴らしさ
 道に迷っても必ず間違いなく戻れる
 バンコクはここより怖い

ここは当たり前のようにとても安全な町
沼津、東京も変わりはない
どの通りを歩いていても何も不安がないのだ
日本の地方の人々は温かい
どこの国でも農業は基本である
日本人、皆がもっている謙遜と寛大さ、やさ
しさと美しさは富士山のような
強いところも弱いところもお手本を見ることが
できた
この詩もこの辺でおしまい
親愛の気持ちをこめてJICAに感謝
学んだ良いこと良くないこと
試してみよう

言葉と理解

スワンニー・タントンチャイ
(経済Aグループ)



いつの日か日本を訪れ、この工業化が進み繁栄した地でさまざまな体験が得られる素晴らしいチャンスに恵まれたいと、ずっと長い間、夢見てきました。そして今回、その機会をJICAから与えていただき、タイから一緒に来日したグループの仲間や日本の友人たちのちょっと面白い行動に出会うことになりました。それは私にとって、とても興味深い体験であり、同時に、私が意図していたものとはかなり違っていた体験でもありました。

今回の来日前に私は日本人の生活に関する本を読み、時間に正確であることを大事にしていることを学びました。そして今回、時間に正確であろうとするために起こる、仲間たちの面白い行動を

目撃することになったのです。たとえば、日課のプログラム終了後ショッピングに出かけ、帰りが遅くなったため、翌朝寝坊し、洗面するのが精一杯で、必ず浴びるシャワーを諦めざるを得なかったり、バスに乗るやいなや熟睡状態に陥ってしまったり、講義の時間中ついうつらうつら居眠りをしてしまったり（講義内容は分かっていても分からなくても聞いておき後で仲間同士で聞き合ったりするのです）。食事の時間については言うに及ばずいつも正確を心がけました。

食事についていえば、私たちは本来、濃い味付けのものが口に合うのですが、日本滞在中は薄い味付けにも慣れました。でもたったひとつ私たちが皆敬遠する食べ物があるのです。それは納豆で、大豆を発酵させて作ったものですが、かなり強烈な匂いがします。仲間の一人が騙されて食べさせられたとき、一口食べるやいなや、みるみるひどい顔になり、皆おかしくて吹き出してしまいました。日本人の友人のなかには、私たちタイ人よりももっと濃い味を好む人もいます。食事をするとは、日本ではとても重要なことと見なされているようです。いろいろなレストランの前に陳列してある食器の大きさや食事の量を見ているとそのように思えます。つまり食器も大ぶりで量も多めなのです。丼物などは時々、一人前で2、3人が食べられるような大きさのものが出てきます。私も何度かレストランで食事をしましたが、全部食べられたことは一度もありませんでした。

私の仲間たちは、日本語が話せないというのに、信じられないくらい上手に日本人とコミュニケーションをとることができます。間違えることもあれば、正しく言えるときもあり、タイ語に英語、さらには身振り手振りも交えながら、理解し合うことができます。

言葉に関しても、記憶に残る出来事がありました。あるとき、私たちは、タイへの手紙を出しに行きたいと思ったのですが、郵便局の所在が分か

らなくて、一人の年配の婦人に尋ねてみることにしました。一生懸命に事情を説明したところ、彼女も理解してくださり、急いで私たちを案内してくださいました。私たちの用が急を要するものであると思われたようで、途中歩いたり小走りに走ったり、ついていくのがたいへんだったほどでしたが、どうにか郵便局に行き着くことができました。私たちは感謝の気持ちでいっぱいになり、用事を済ませた後、花を買いに行き、彼女を訪ねて手渡しました。その年配の婦人は少し驚かれた様子でしたが、私たち一人一人に何度も日本語でお礼を言ってくださいました。そして私たちも自分たちがタイ人であることなどを話したのです。彼女も私たちのことを覚えていてくださるでしょうし、私たちも彼女から受けた親切を忘れることはありません。

今回、日本で体験したさまざまな印象深い出来事から得たことは、言葉や文化の違いは私たち全員にとってなんら障害となるものではなく、反対に、お互いに理解し合い、共に気持ちを分かち合おうと努力するうえでの励みとなるということでした。多少の行き違いは、あったかもしれませんが、結局私たちにとって、素晴らしい成果が得られる結果になったのです。

青年招へい事業に参加して

ドゥアンペン・チナライ
(経済Bグループ)



講義からは学術的な知識を得、工場などの見学では進歩した技術や卓越した運営を目のあたりにし、質疑応答ではさらに知識を深めることができました。愛知県知事、犬山市長、犬山市議会議長への表敬、矢崎総業、NTT霞が関コミュニケーションセンター、中部電力碧南工場やトヨタ自動車元町工場等の見学では、どこでも温かく歓迎され感動した。

合宿セミナー分科会では、日本人の友人ができたことを確信することができた。合宿開始当初は言葉の障害を心配していたが、文化、習慣、日常生活について、交流や意見交換をし、お互いの共通点や相違する部分を知り合えた。セミナー終了後も、この友好の絆は消えないであろう。

2泊3日のホームステイは、最も印象的なプログラムのひとつであった。期待と同時に、不安に駆られるホームステイであったが、みんなホストファミリーに歓待され、日本人の日常生活やその温かい心情に触れることができた。3日間ではあったが、涙で別れを惜しむホームステイになった。

私たちタイ青年が、日本でこのような有意義なプログラムに参加できたのは、JICA、タイ総理府青少年局、さらに日本の政府並びに民間関係者皆様のご尽力の賜物と深謝申し上げます。また、このような素晴らしい体験ができましたのも、コーディネーターの方々のご協力と感謝いたします。

日本の印象

ウィロート・オンガナクン
(ASEAN混成環境保全グループ)



私は、日本の美しい秋のなかでの30日間の滞在を通じ、とても深い感銘を受けました。仕事を離れ、精神的にも開放された環境のなかでのASEAN諸国や日本の人々と、旅をし、いろいろなことを学ぶことができました。日本の美しい自然、貴重な文化や日本の心を体験し、日本がどのように経済成長と環境保全および自然の保護とのバランスをとっているかをも学ぶことができたと感じます。しかし、このような学習は、そのこと自体を単に知ることだけを目的として学ぶべきではなく、経済と環境保全の双方の改善の実現を目的として学ばれるべきでしょう。日本の持続可能な開発を認識し、私はそれを自国における問題の解決に応用させるつもりです。

日本のことを少しずつ知るにつれ、ASEAN諸国と日本の人々との間で友情が芽生えました。同じASEAN諸国に属するといっても、私たちは一概に同じとは言えません。しかし、共に仲良く生活することを学んだ1カ月間は、たいへん有意義で楽しいときでした。ただし、プログラムの終わりを迎え、この友情も薄れ、ただの知り合い同士となってしまう、いつしか忘れ去られることもあるでしょう。しかし、古い諺に「離れていることがかえってお互いの情をこまやかにする」とあるように、それは私たちの心のあり方次第であるのかもしれない。

そして、このような貴重な機会を私たちに与え

てくれた日本の方々の寛大さに対する感謝の気持ちをなんと言葉で表現すればよいのでしょうか。さらに、一番大事なこととして、このプログラムに参加した勤勉なコーディネーターの方々の仕事の責任感という枠を超えた、心をこめた私たちに対する姿勢、仕事ぶりが、このプログラムの心を支えているということをおぼえずにはられません。最後にひとつ言わせてください。

「私たちは、また会えるでしょうか……？」

■アジア

■バングラデシュ

日本：調和と平和をたずさえて
発展した国アハメッド・カイカウス
(公務員グループ)

日本は世界で最も発展した国のひとつであり、訪問先としても非常に魅力的な所である。私を含めたバングラデシュの20人は、今回この素晴らしい国を1カ月にわたって見聞する機会を与えられた。JICA主催の「青年招へい事業」で日本に来ることができた私たちは幸運だと思う。東京、山梨、帯広、大阪、京都、広島と多くの場所を訪れ、思い出深く忘れがたい1カ月となった。

日本は、私がつねに一番行きたいと思っていた国である。なぜ資源に恵まれないこの国が、これほどまでの発展を遂げたのが不思議だったからだ。私の日本行きの夢は、8月29日に成田空港に降り立ったときについに現実となった。1カ月のプログラムを終えた今、日本が発展と繁栄を運命づけられた国だと思われてならない。来日前に日本の発展ぶりや工業化の過程、社会の特性に関する多くの本を読んではいしたが、まさに百聞は一見にしかずであった。まず東京に着いたあとホテルの周辺を歩いてみて、この街の通信・交通網がまるでクモの巣のようにはりめぐらされていることに気がついた。グループの一人は私にこう言った。

「これが本当に人間わざなんだろうか？」

日本人が地上と地下の双方を最大限に活用する

のには驚嘆させられる。

1カ月のプログラムには、講義や交流、ホームステイ、見学旅行などが盛り込まれており、どれも興味深いものだった。来日前には簡単な日本語も教わった。日本語には丁寧な表現が多いと思ったが、日本に来てみてそのわけが理解できた。日本人は非常に他人を敬い、気前もいい。はじめは私たちが客人なので特別扱いしてくれているのかと思ったが、すぐにこれが日本人のごく普通のふるまいであることに気がついた。

日本人との交流では言葉の壁がたちはだかった。しかしひとたびコミュニケーションが図れると、とても親切で交流に熱心な人たちだった。どの日本人も内向的だが、誰かが寄ってきて話しかけさえすれば、特に日本的なやり方でそれをすれば、日本人は最高の友人となりうる。日本の国民性のなかでも最もきわだっているのが、日本人の行動の同質性だと思う。日本は島国とはいえ、世界中の国々とビジネス、産業、情報・通信網などを通じて密接につながっている。それにもかかわらず、日本がこれほどまでの同質性を維持することができるのは、日本の国家にとって大きな強みだと言えよう。

日本はとても安全な国である。このような平和な社会は、信頼や他人に対する敬意、誠実さ、愛国心などがあってこそ実現するのであろう。特に警察が始終見張っているわけでもないのに、日本には平和と調和が存在した。どこに行っても信頼感が感じられ、人は自分の仕事に熱心で、他人の仕事にも敬意を表す。日本では高度技術はすさまじい速度で発達したが、伝統的なものも保存されている。物質的な進歩もピークに達したが、それによって人間の質が落ちたわけでもない。日本人はとても感受性が強く、思慮深い。私のホストファミリーにも、これ以上望めないくらい歓待していただいた。

私は以前、社会の平和と調和のためには神の存

在がどうしても必要だと思っていた。しかし日本はそうではなかった。日本は神の存在が取り沙汰されない社会に見えた。私が会った日本人の大半は特に宗教を意識してはいなかったし、なかには宗教をどうとらえていいのか分からない人もいた。宗教的儀式による団結がなくとも秩序正しく機能する国を目のあたりにして、私は驚くばかりだった。

広島訪問は特に印象深いものだった。ここはグループの全員が訪れたいと思っていた場所である。私たちは記録映画を見たあと、原爆資料館や原爆ドーム、平和公園を見学した。そこには原爆がもたらした破壊の様子が見て取れた。しかし信じがたいことに、どの展示品からも伝わってくるのは平和への願いだけだった。原爆は何十万人もの命を奪ったのに、憎しみを感ぜさせるものが何ひとつないのである。広島が発するの平和へのメッセージのみ。日本は原爆投下と戦争がもたらした破壊から、いち早く教訓を得たのである。反戦を唱える今日の日本の姿は、国際社会も見習うべきであり、まさに日本は世界平和の開拓者である。

最後に私の日本滞在の印象を言えば、感銘を受けたの一言につきる。この国と社会を見ることができた1カ月は、素晴らしくかつ爽り多いものだった。これから私はたくさんの思い出と新しい考え方をたずさえ、多くの日本人の友人を残して故国に帰る。私が見いだした日本はバイタリティにあふれた国で、そこには平和と調和が同居する社会があった。

■アジア

■ブータン

日本での経験

ブータン参加者一同
(教育グループ)

私たち全員にとって日本への旅は初めてです。ですから、ブータンから日本へのフライトは本当にわくわくする楽しいものでした。

日本はあらゆる面で訪れるに値する国でした。人々は素朴で、勤勉であり、そしてまた協力的で時間を守る人々でした。このような人々だからこそ、短期間の間に今日の先進的な姿を達成できたのだと思いました。

伝統、文化も大切にされていることが分かりました。多くの歴史的遺産がよく保存され、若い世代にとって格好の歴史的教材となっていました。また、国際語(英語)の強い圧力があるにもかかわらず、日本の人々の自国語を保存していくという固い決意に感銘を受けました。

進んだ交通および通信システムは日本人の時間管理と仕事の質を大いに高めました。また、義務教育制度は識字率の向上に貢献し、その結果として国の急速な発展が可能となったのでしょうか。学校施設はたいへん充実しており、教師、生徒双方にとって理想的な環境にあることも分かりました。

私たちは、この1カ月の滞在で多くのことを学ぶことができました。帰国してからこの国で学んだことを本国の教育分野で活かすことができると確信しています。

■アジア

■インド

現実となった夢

アヌリタ・ギイク
(教育グループ)



日出づる国・日本は、いつでも私の夢だった。今回インド教育グループの一員として日本訪問の機会を得て、私の夢は現実のものとなった。太平洋上にかかる雪のように白い雲の上を飛び、日が沈んだ後に成田に着陸し、夢気分は終わり、私の冒険が始まった。光に溢れた東京の沸き立つような街路を通り抜け、ホテルに至る1時間のドライブは、まるで時空を超えた場所への旅をしているような幻想に陥るに十分な刺激だった。

合宿セミナーを過ごした熱海の朝は、夕空に映える熱海市のシルエットの美しさ同様に素晴らしい。静かで美しい熱海の海岸を散歩しながら波の響きに耳を傾けていると、人生が永遠に奏でられ続ける音楽のように感じた。

セミナー場所への往復の移動時や合宿セミナー中の日本青年との歓談は、充実した体験だった。また日本家庭に家族の一員として迎えられ、滞在することほど日本を経験するのに適した道はないだろう。短い間ではあったものの、ホームステイ中は自分の家族と過ごしているかのように感じた。私のホームステイ中に、日本の結婚式に参列する機会があった。美しく刺繍を施された、豪華絢爛な打ち掛けをまとった花嫁を見て、私が子供の頃、母がよく聞かせてくれた妖精物語の光景が不意に目に浮かんだ。一瞬、自分も物語のなかの登場人

物になったような気持ちになり、子供時代に戻ったように感じた。私たち一人一人は、ホストファミリーの皆さんが注いでくれた愛情と好意によって、確かに若返ったのだ。私たちがホームステイ中に体験したことはさまざまだが、いずれも忘れがたい思い出となった。

岐阜県の山深い隠れ里のような飛騨高山の寺院、神社、河川、原始時代から手つかずのままの自然。岩々の間に生えた苔の上に静かに滴り落ちる泉の水。この美しい自然の榮華を受け止めるには、私はあまりにも小さな存在だ。

どこへ行こうと出会える、地域の特産品等を扱う素敵なお土産物店、骨董品店、レストラン……。他国とは比べられないこの国の雰囲気に入れることができる。

今回の日本への旅で得た素晴らしい思い出は、いつまでも忘れることなく私の心のなかで温められていくことだろう。本当に私の夢は現実のものとなったのだ。

■アジア

■モルディヴ

忘れ得ぬ旅

モルディヴ参加者一同
(教育グループ)

私たちが日本に着いた日。それは私たちに活力、幸福、興奮をもたらしてくれた日でした。世界で最も進んだ発達した国。平和な国。

日本が、第2次世界大戦後の生活を充実させるために最大級の努力を払ってきたことがよく分かりました。日本で過ごしたのは短い時間でしたが、日本の生活をいろいろな面から体験することができました。

一番印象的だったのは、日本の人々の行動でした。日本の成功の秘訣は、その規律ある行動と勤勉さと時間厳守によるものでしょう。そこには厄介者は誰もいません。老若男女すべてが同じように暮らしているのです。

また、日本の人々が相手を敬う姿にも感銘を受けました。肌の色など関係ありません。黒かろうが白かろうが、またアジア人であろうがヨーロッパ人であろうが、すべての人々は等しく敬われているのです。

日本の教育制度は非常に充実しています。生徒たちは、大人になってから役に立つ日本の文化、生活について、ごく初期に学んでいます。また、教育の機会均等も行き届いています。

私たちはたいへん貴重な経験をし多くの知識を得ることができました。これは、私たちのこれからの生活に、また教師としてのキャリアにとって、きっと大いに役立つものとなるでしょう。

■アジア

■ネパール

思い出の日本

ヤショダラ・パント
(教育グループ)



日本——日出づる国——そこでは愛と恵みにあふれた太陽の光が人々の頬にふりそそぐ朝が始まる。その国の人々は希望と新しいアイデアと勇氣に満ちた一日をスタートさせ、嬉々として職場に向かう。日本人は忠実にかつ、誠実に仕事をする。彼らにとって仕事は個人の義務ではなく、組織や国に対してのもの、まるで神に対するもののようなものである。日本はいまや世界の頂点に立ち、私たちも同じアジア人としてそれを誇りに思っている。

日本には主に仏教、神道、キリスト教という3つの宗教が存在する。ほとんどの日本人は仏教徒であるが、日本発祥の宗教である神道を信じる人やキリスト教徒も少なくない。キリスト教はおそらくアメリカの影響だと思われるが、信者は若い世代に多いようだ。日本での滞在を通して、日本の文化は古来から続く豊かな仏教の教義をよりどころとし、長年受け継がれてきたものだと感じた。

日本では全国的に同じ言葉が話されており、あらゆる面で統一性ということが感じられた。時間は貴重である。時間を有効に使う国は発達するというのが、日本はその良い例である。時間を適切に最大限に利用することにより、日本は素晴らしい発展を遂げたのだ。

そのほかにも優れた点として、教育制度が挙げ

られる。義務教育は充実しており、識字率は100%である。教育をきちんと受けた国民は国の発展の重要な柱となるが、彼らが日本の発展の基盤づくりに果たした役割は非常に大きい。

日本は花の香りにあふれた美しい国でもある。とりわけ京都は、伝統と文化が大切に保存され維持されている最も美しく歴史ある町のひとつである。神社と寺院の街といっても過言ではないだろう。広島もまた美しく、訪れた誰もが平和と命について考えさせられる。人の命は尊い。平和に幸福に生きるというのは非常に大切なことである。平和の使者である釈迦牟尼生誕の聖地であるネパールの国民として、私は日本が世界平和実現に向けて今後も貢献するように願っている。日本と日本の皆様がいつも幸せでありますように。

■アジア

■パキスタン

ありがとう、日本

タリック・フセイン・パティ
(保健医療グループ)



1カ月の日本滞在中を通して、研修はもちろんのこと大いに交流を図ることができた。日本人とパキスタン人との間に多くの共通点を見いだす一方、相違点も発見した。両国とも東洋に属し、他人に対するもてなしや思いやり、家族観などについてはよく似ている。しかし、ある側面において日本人とパキスタン人の間には顕著な違いがある。日本人のほうが自制心、仕事欲の旺盛さ、法の遵守、勤勉さ、手際よさで勝っている。パキスタン人にとって日本の兄弟姉妹から学ぶべき点は多い。この1カ月の滞在中、私たちは特別なもてなしを受け、たいへん光栄に感じている。また、日本人により親近感を覚えるとともに、日本人観を新たにすることができた。

私たちは日本の保健医療施設に特に感銘を受けた。しかし、このような施設を得るには政府の優先度と財力が必要である。一般的に日本の医療従事者は私たちより辛抱強く、より優れたサービスを提供している。これは仕事上の満足度、彼らが享受している社会的地位、福利厚生の実現度などが影響しているのだろう。

専門分野の視察のほかにも、個人レベルでも得るものがあつた。日本人の生活習慣に触れたホームステイ、日本青年との交流、コーディネーターの絶え間ない助言や協力には大いに感銘を受けた。

各ホストファミリーは限られた日数のなか、信じ難いほどの愛情を私たちに注いでくれ、私たちはとてもくつろぐことができた。日本の青年は私たちによく関心を示し、出会ったことを率直に喜んでくれた。そしてコーディネーターや訪問先の皆様の惜しみない協力、気配り、配慮に対し心より感謝する。

私たちは異文化を体験し、新しい知識を吸収し、日本人に対して尊敬の念を抱きながら日本を後にする。皆さんと別れるにあたり、心苦しく悲しい思いでいっぱいだ。ありがとう、日本！ 本当にありがとう。

■アジア

■スリ・ランカ

和歌山—思い出の地

P.A.S.P. ジャイラット
(教育グループ)



日本に来る前、日本はたいへん美しい国だと聞いていた。だが、こちらに来てみて、日本は美しい国であるばかりか、人々も美しい心をもっていることを知った。日本での短期間の滞在で、日本、日本人、そして日本人の生活様式についての理解が深まった。

プログラムはよく準備されたものだったので、私たちのグループは成功裏に終了できた。興味深く、たいへん楽しかったプログラムや催し物のなかで、私は、特に和歌山県での地方プログラムについて述べたいと思う。

今でも和歌山駅に到着したときの、私たちに対する温かい歓迎を思い出することができる。和歌山は美しい自然に恵まれ、自国にいるような気がした。美しい海岸に出かけ、丘の頂上からは壮大な海の景色を眺めることができた。和歌山の家庭に滞在し、ホストファミリーとともに、美しい場所をたくさん訪れた。実際、和歌山は風光明媚なところだ。

和歌山では、私のホストファミリーも含め、多くの日本人と親しくなれた。彼らを通じ、日本人の心を感じることができた。親切で、もてなしに厚い人たちだった。スリ・ランカ青年は皆、ホームステイでの忘れがたい思いを胸に、ホテルへ戻ってきた。誰もが自分のホストファミリーの方々

に別れを言うのがつらかった。スリ・ランカ青年にとり、ホストファミリーのご家族の方々は、とても大切に親しい人たちとなった。

プログラムの内容はどれもきわめて興味深かったが、私はとりわけヨット試乗を楽しんだ。教師という立場からは、2校の学校訪問は特に重要であった。先生方や校長先生はたいへん親しみやすかった。このような親しみもてる環境は、教師と生徒の関係や、学習課程に役立つものとする。

マリーナ・シティ見学もとても楽しかった。エッセーの締めくくりとして、和歌山での滞在はたいへん良かった、と言いたい。また、スリ・ランカの参加青年は誰も和歌山県と和歌山の人たちを忘れることはないだろう。私たちは和歌山での忘れがたい、素晴らしかった日々をいつまでも大切にすることだろう。

■アジア

■モンゴル

百聞は一見にしかず

バドボルド
(公務員グループ)



まず、何にもまして「青年招へい事業」に参加できて非常にうれしく、満ち足りた気分であるということを申し上げたい。

モンゴルには「百聞は一見にしかず」という諺があり、ただ自宅にごもって日本についての書物を読んだり耳にしたりするのと、自ら日本を訪れて旅行するのでは、まさに昼と夜ほどの違いがあるといえよう。

来る21世紀を担うべき各国の若者に交流の機会を与え、今後のための友好関係、相互理解の基礎を築きあげ、未来における世界平和を実現していくかんとする日本政府が描く将来を洞察した政策には深く共鳴するとともに感服せざるを得ない。

私たちが訪問させていただいた先々ではどなたも温かく迎えてくださり、厚くおもてなしいただいた。今回の旅行では、非常に多くの体験をし、さまざまなことを見聞きすることができた。もし、これらすべてのことを記述しようとするならば、膨大な時間をかけなければ語り尽くせないであろう。こうして私たちのために今回のプログラムを準備して下さった各機関の方々に心から感謝を申し上げたい。プログラム全体には非常に満足しており、申し分のないものであったことはいまでもない。

日本での滞在中に目にしたものの、知り合った人々

は、今後も決して忘れることのできない思い出として心に刻まれるであろう。

特に、合宿セミナーに参加した日本人青年、ホストファミリーの方々の優しさには感激させられた。時には言葉の違いなどの困難が生じたこともあったものの、意思の疎通には全く妨げとならなかった。日本人青年、ホストファミリーの方々と食事を共にし、語り合い、一緒に遊んだり、歌ったりしたことは、何度回想してもいかに素晴らしかったかが思い起こされる。彼らとの間には、まさに真の友情が芽生えたということを確認している。

日本の風光明媚な自然、心地よい気候、歴史的文化遗产などはいくら見ても見飽きないものであった。また、私たちは日本の先進的側面を目のあたりにして感嘆するとともに、日本国民の驚くほど勤勉で忍耐強い国民性をも窺い知ることができた。

特に広島市を訪れて目にしたさまざまなものは、私たちの心に深い痛みを与え、日本人に対する如何ともしがたい哀惜、畏敬の念を生じさせた。さらには戦争の残酷さ、平和の貴重さへの認識をより一層深めるにいたった。広島市がこれまでに積み重ねてきた平和への努力を思いやると、私たちは悲痛のあまりに笑うこともできなくなり、声すらも失うほどであった。このような恐ろしい災難は、いかなるときも誰の身にも、決して再び繰り返されてはならない！

モンゴルに帰ってからも、日本で見聞きしたことや日本の友達のことを常に思い出すであろう。今後とも日本や日本で知り合った人々とは未永く交流を続けていきたいと思う。

当プログラムの実行に当たられたJICA、JICE、国際交流サービス協会、金沢国際交流財団などの組織、並びにこれらの職員の皆様方には重ねてお礼を申し上げたい。なかでも私たちのためにお骨折りくださり、プログラムに随行してくれたこれ

らの各組織の担当者の方々のご活躍をお祈りし、感謝の意を表したいと思う。

私たちが共に築いた素晴らしいこの友好関係が未永く続いていくことを願ってやまない。皆様のご健勝をお祈りするとともに、お礼を申し上げます。

■アジア

■ミャンマー

永遠なる親善の旅

ドー・チーチーエ
(教育グループ)



私たちミャンマー教育グループは1996年9月11日にJICAの「青年招へい事業」によって、世界で最も工業的に繁栄している日本の首都東京に初めてやって来ました。その後北海道の道都札幌を訪れ、日本とミャンマーの友好をより一層深くすることができました。また、日本の文化と歴史を代表する地である京都へも青少年育成国民会議のプログラムによって訪ねることができ、広島でも関心を深く持つべき場所のひとつとして多くのことを学ぶ機会を得ました。今回の旅行全体を通して、日本の教育、行政、経済、文化、歴史的仏教建築などについて学び知る機会に恵まれ、私たちにとってたいへん得るところの大きいものでした。

日本の教育においては、小学校から中学校までの児童・生徒に教育を受けさせない親が法律によって罰せられるということを知り、子供たちの将来にとって素晴らしいことであると感じました。また、文部省が生涯教育制度を導入して年齢を問わず学ぶことができるという日本の教育事情に対し、私たちは驚嘆するとともに敬意を表したいと思います。

日本のユースホステルにおいて私たちミャンマー青年グループが日本の青年グループと共に寝泊まりし合宿セミナーを行ったことは、両国の文化や教育についての知識を交換する良い機会となり

ました。

教育（プログラム）に関して最も特徴的だったのが札幌養護学校への訪問・見学プログラムでした。私たちが訪れたとき子供たちはたいへん楽しそうに私たちに挨拶をしました。子供たちは体は不自由ではありましたが、先生方の誠意・慈悲・正義感によってその苦しみを乗り越えて学んでおり、普通の子供たちと同じように楽しげに学校に通っていました。私たちはこの学校の愛情溢れる先生方に強い尊敬の念を抱きました。

ホームステイをする機会を与えられて、日本の家庭の食・住について学ぶことができました。ホストファミリーとたいへん親しくなることができましたし、家族の温かいもてなしと心配りを私たちは一生忘れないでしょう。

歴史ある京都と奈良を訪れたときも、日本人が先見の明をもって千年以上にわたって歴史的文化的遺産を守り、子孫に受け継いできたことにたいへん驚きました。

1945年8月6日朝8時15分、人類の歴史上初めて原爆が広島に投下され、閃光の中で町のほとんどが破壊され、何十万人もの人々が亡くなりました。平和記念公園、資料館を見学し、原爆の被害によって広島市民がどれほどの悲惨な目にあったかを目の当たりにし、私たちミャンマー青年グループは「広島の悲劇を二度と起こしてはならない」と心から祈りを捧げました。

最後に、私たちミャンマー青年グループのためにご尽力くださった日本政府と関係機関の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、日本の青年の皆様をミャンマーの教育、行政、経済、文化、歴史的仏教建築について知っていただくために、ミャンマーに来てくださるようご招待しなければならぬと思っております。

■ アジア

■ カンボディア

日本の思い出と将来の希望

ロー・チャー・ワナー
(教育グループ)



第2次世界大戦後、日本の経済は急速に発展しました。その発展を初めて見た私たちは日本人の忍耐強さと勤勉さを改めて実感し、感銘を受けました。

今回の滞在を通じて私たちは、日本の文化や習慣を理解するとともに、日本青年との交流を深めることができました。温かく迎えてくださった多くの皆様の恩を一生忘れないでしょう。

この研修により、私たちは日本の教育制度や経済、工業、そして日本人の生活を知ることができました。日本の政府は国の発展に欠くことのできない教育の分野に重点を置き、すべての学校の設備と教材を整備し、優秀な教師を養成しました。その結果、国民の100%が教育を受けることができるようになり、社会を発展させるための基礎的な知識を学ぶ機会を得たのでした。

広島市の平和記念資料館では、1945年に日本が受けた悲惨さが痛いほどよく分かりました。平和を愛する一人の人間として、私は世界中の人々にすべてのものを破壊する戦争をやめていただきたいのです。平和と安定のために協力してほしいのです。

「青年招へい事業」は日本とカンボディアとの友好を深めるだけでなく、多くの国々の平和と安定に貢献しています。

人材育成を担う教師の一人として、私は帰国後、本研修で得られたこの貴重な経験を20年間の内戦のために荒れ果てた国の復興と開発のために役立てたいと思います。

最後に、この青年招へい事業を通じて世界の人々の友情と協力のために貢献して下さった日本政府をはじめJICAや関係機関の皆様にご感謝し、将来に向けて日本とカンボディアの友情が一層深まることを希望します。

■ アジア

□ ラオス

日本での1カ月の経験

ウィエンゲン・カムウォンサ、他
(教育グループ)

日本に滞在していた1カ月間、私たちは感動で胸がいっぱいでした。物質的な面だけではなく精神的な面でも、宿舎、食事からいろいろな活動に至るまで歓迎してくださり、日本側の担当者から温かいもてなしを受けました。日本側はいつも、いろいろな活動や研修を通して具体的に学ぶことができるような、私たちのニーズに即した計画を立ててくれました。この1カ月のプログラムを通して、私たちは教育、文化、経済、社会などさまざまな分野での経験から多くのことを学ぶことができましたと思います。

昨年度の招へいに次いで2度目の私たちラオス教育グループは、この「青年招へい事業」が世界の国民をお互いに近づけ理解し合えるようにし、国と国との絆を深め、全世界の平和と発展に貢献する事業だと考えます。特にラオスと日本の、なかでも高知県との絆が深まるように願ってやみません。

プログラム中の交流、意見交換はどれも実り多いものでした。日本人青年との出会い、日本人教員や生徒との意見交換、そして最も素晴らしかったのは日本人家庭にホームステイしたことです。ホームステイを通して私たちは日本の人々の日常生活や社会生活、習慣を知ることができました。

今回、日本に来て私たちが得たものは多くの経験です。私たちはそれらをラオスに持ち帰り、特に教育分野、経済分野、文化、社会の分野において、国の現状に合った形で役立てたいと思います。

私たちラオス教育グループ全員は、このプログラムに参加することができ、それぞれが期待して

いたような成果を得ることができました。このような機会を与えてくださり、さまざまな便宜を図ってくださったJICAをはじめ今回のプログラムにかかわったすべての団体、そして日本政府に心よりお礼申し上げます。

■アジア

□ ヲイェトナム

忘れられない日々

ズオング・クオック・フン
(公務員グループ)



「青年招へい事業」への参加期間はあっという間に終わりました。別れのときはいつも何を話せばいいかなかなか分からないものです。1カ月という期間は人生のなかでは決して長い期間ではありませんが、桜の国に滞在した1カ月間での忘れられない思い出は公務員グループそれぞれのメンバーの心の中で特別な場所を占めることでしょう。

私たちにとって、日本国、日本人についてより多くを知ることができる楽しい期間でした。特に、民族伝統を守りながら非常な努力によって日本を世界のなかの経済大国にさせたことを知る機会でもありました。講義を受け、実際に施設見学に参加し、多くのことを学ぶことができました。この経験を今後自分の専門分野に是非とも生かしたいと考えています。特に、日本の公務員制度のなかでの「公務員の数は少ないが、それぞれの人が業務に精通している」というところを生かしたいと考えています。

今、私の心の中に、日本青年、そして3日間一緒に暮らしたホストファミリーの方々に出会ったときの印象深い姿が浮かんでいます。すべての皆様は、私の友人であり、私にとって最も親しみのある方々となりました。言葉、習慣の違いがあっても、こんなに早く仲よくなれるものかと不思議に思っています。こうしてすぐ仲よくなれたのは、

おそらく日本人のもてなし方がよかったのと、若い人が共通な思いを抱いているからだ私の友人が言いました。これは十分な解答ではなかったかもしれませんが、少なくとも解答の柱になっていると私は思っています。

プログラムの終わり頃、私たちは広島にある平和記念公園と原爆資料館を訪れることができました。そこで悲惨な映像をみて、私の友人の多くは泣きだしました。罪のない魂のために涙をこぼしました。戦争を経験した者のみが戦争で失われたもの、戦争の悲惨さをよく理解できるのだと思います。それゆえ平和、幸福な暮らしは越日二国の国民だけの望みではなく、全人類の願いになっています。

私たちのプログラムが無事に成功したのは、ひとえにJICA、JICE、公務研修協議会、とまこまい国際交流センターの私たちへの大きな関心、支えがあったからです。特に、コーディネーターそして各団体の職員の皆様の明るさ、活発さ、責任感、感情の豊かさ、あらゆる面への関心、さらには完璧な気配りは私たちの見習うべきお手本です。

訪問客に手厚いもてなしを惜しみなく与えてくれる、美しい日本国、そしてあっという間に親密になった新しい友達の皆様と別離の言葉を交わすことにはためらわずにいられますが、とりあえず「さようなら」と言わせていただきます。たとえば、どんなに離れていても私たちはあなたの方のことを忘れることはなく、私たちは常にお互いに身近な、良き友人であると確信しています。日本で生活した日々は、いつまでも私の心の中に色あせることのない思い出として残るでしょう。いつも温かく見守ってくださってありがとうございました。両国そして両国の青年の友情がより親密になりますようにお祈りいたします。

さようなら、またお会いしましょう。

友情の美しい印象

チャン・ミン・マン
(経済グループ)



JICA主催の「青年招へい事業」のベトナム経済グループとして、経済、社会の分野から24人の代表青年が日本を訪れました。1カ月の滞在の間(1996年6月5日～7月4日)、参加青年は気候や環境の違いをもものともせず、JICA、JICEおよび各協力団体の企画したプログラムに積極的に参加しました。

経済グループのために用意されたプログラムはとても合理的で楽しいものでした。どんな所に行っても私たちにに対する対応はとてもきめこまかく親身あふれるものでした。プログラムの内容はそれぞれのメンバーの専門分野に新しい知識や有益な経験を与えてくれました。

日本についてひとりひとりのメンバーが感じたことはそれぞれ異なるでしょうが、「桜の国」日本の共通の印象は、やはりハイテク産業、整った社会基盤、世界一の経済力、そして観光名所だったようです。日本の人々は規律を守り、社会関係を尊重し、若々しく前向きで、誠実であり、そして客人を厚くもてなします。

それぞれのメンバーは講義を通して経済に対する新しい知識を得、企業訪問では企業の組織や多様な生産形態を学ぶことができ、私たちの経営管理や計画にとって役立つ経験をしました。工場の人々が最新機械の揃った近代的な流れ作業のなかで一生懸命働いている姿を実際に自分の目で見て、私たちは日本の経済運営の仕方がある程度までは

理解することができました。これらは、きっとベトナムの経済発展と工業化、現代化の過程にたいへん役に立つことでしょう。

プログラムの全体を振り返ってみると、河口湖での日本青年との交流、そしてホームステイのひとつとかが最も深い印象として残っています。合宿セミナーでの交流や討論をする時間は限られていましたが、まるで兄弟のように一緒に食事をしたり生活をともにしました。この共同生活をした日々のなかで、私たち両国の文化、習慣などの情報を交換することができました。両国青年の恋愛、趣味、希望など互いに理解し合う時間をもつことができました。そして、いくつかの共通点を見いだしました。それは、それぞれ自分の民族に誇りをもち、一生懸命に勉強し、祖国に尽くし、そして人類愛に満ちた共生精神のなかで生きることです。

ホストファミリーの皆さんが私たちが家族の一員が帰って来たかのように喜んで迎えてくださったことも決して忘れることはできません。また、ホストファミリーが私たちを見送る際に見せた、まるで自分の家族が遠くへ出かけるかのような別れがたい表情も忘れることができません。

日本でできた友達ひとりひとりの顔、瞳、笑い、しぐさ等は私たちそれぞれの記憶にますます深く刻み込まれていくでしょう。それはきっと両国の友情のために忘れられない思い出、そしてずっと守り続けていくべき思い出となるでしょう。

桜の咲く国での思い出

トリエウ・チー・ナイ
(教育グループ)



1996年8月21日から9月19日までの間、日本で行われた「青年招へい事業」に参加できたことは、喜ばしいかぎりです。過ぎ去ったこの1カ月間にあった出来事は私にとって好ましい印象ばかりでした。日本滞在中、日本人との交流を通してたくさんの有意義なものを見学し、学びました。

米日初日から、心の込もった、非の打ちどころのない完璧なもてなしを受けました。ヴィエトナムでの現地プログラム、また日本での共通プログラムを通して、日本のこと、歴史、そして日本人のことが分かるようになりました。特に、日本の経済、政治、文化についての講義はとて興味深いものでした。そして、日本語学習のおかげで、日本人との交流がとて素晴らしいものとなりました。江戸東京博物館、武道鑑賞、茶道、華道を通して、日本文化の素晴らしさに感銘しました。豊かで、たいへん素晴らしい伝統文化をもつ日本を再確認できたのは、地方プログラムでした。ここで深くお礼を申し上げたいのはユースワーカー能力開発協会の堀添さん、安納さんです。おふたりの熱心さのおかげで、たいへん素晴らしいプログラムを実現することができました。文部省訪問をはじめ、代々木小学校訪問や茶道・華道の体験など、私もグループの青年も皆たいへん喜んでいました。特に、合宿セミナーの3日間、日本人青年と一緒に過ごし、新しい友達ができ、両国の将来に向かって交流を深めました。

青い海に浮かんでいる島・沖縄県の訪問を通して、独特の文化に触れることができるとともに忘れられない思い出がたくさんできました。沖縄県国際交流財団の方々をはじめ、プログラムを企画してくださったスタッフの皆様、各訪問先の皆様からの盛大な歓迎を受け、まるで21世紀に向かうための人間対人間の愛と尊重を奏でる音楽のようでした。沖縄の人々の生活のなかから、価値のある文化・生活様式を多く学びました。

長崎の原爆資料館を訪問した際、強い感銘を受けました。第2次世界大戦によって破壊された国土を回復させたその早さに驚きました。空が常に澄み渡るように、また両国間の友情が未永く続くために力を尽くさなければなりません。

1000年の文化をもつ京都を訪ねることができて、たいへんうれしく思いました。京都は日本の精神と日本そのものの姿を表す街であることも知っています。木々の間に見え隠れする寺院の姿は訪れる人々の心にやすらぎと平安をもたらしてくれます。私にとって、東京のイメージは立派でしたが、京都のイメージもそれ以上になお華麗でした。西日本の文化・経済の中心だと言われている3番目の大都市、大阪も見学し感銘しました。

青年招へい事業はとて素晴らしいプログラムでした。有意義な出会いを計画してくださった両国の政府に感謝いたします。JICA、各団体が私たちのために温かい気持ちで接してくださったことを感謝いたします。

いつまでも忘れることはありません。

旅で感じたこと

ハー・ヴァン・ニウット
(農業グループ)



今回、初めて桜の国といわれる日本を訪れたのは、ヴィエトナムの青年や私自身にとって幸せなことです。学生の頃から日本の国や日本人について、武士道精神、茶道、着物などのような美しい伝統文化や、ホンダ、トヨタ、ソニー、パナソニック、ナショナル、ヒタチ等のような有名ブランドと同様、日本は世界一の経済発展国であることを聞きました。私たちの認識は正しいかどうか、日本での約1カ月間の滞在を通し、この解答を得ることができました。

自分自身の理解力の限界や短い期間で、日本の国や日本人について満遍なく深い理解を得ることは無理でしょう。しかし、自分で触れ、見た日本の国や日本人の現状を私は深く認識しました。この認識は人によってさまざまですが、私にとって印象的でもあり、真剣な考えでもあります。よく整備された現代的な交通基盤に敬服したのは日本での最初の感想でした。この交通網は広く、細かく、そして都市、地上ばかりでなく、山、農村、地上の空間まで延びています。実際この交通網は一軒、一軒の家まで延びています。次に感じたのはサービス業等の活動における近代化、自動化のレベルです。地下鉄の駅での切符販売、管理等、または町の中の飲物自動販売コーナー、自動開閉式ドア、工場内の自動化ライン等のようなものは今まで見たこともなく、想像もできませんでした。日本経済について、自分のすべての感想を述べる

ことはできませんが、ひとつ思うのは日本青年は自分たちの国の経済を誇る権利があるということです。もうひとつ驚いたのは、日本の国土の大部分は山や海でありながら、輸入に頼らず、食糧問題を解決できることです。その安定さを助けたのは近代化、工業化の政策ではないでしょうか。これは印象的でした。

日本滞在中、最も深い印象は私たちと触れ合った日本人および日本青年への思いです。どこへ行っても明るく、親切に、ていねいに迎えられたことは私たちをくつろがせ、身近に感じさせました。また、日本の人々や生活を知ることができたホームステイの時間を忘れることはできません。ここで、言葉の違いがあっても、人々の信頼感のおかげで克服され、人々がもっと近づくことができました。

日本の特徴は、さまざまな所で、歴史の遺跡が大切に保存されていることで、これは次の世代の教育のために意味をもちます。最も深い印象は水俣病および長崎原爆後遺症です。水俣病資料館や長崎原爆資料館で保存されているものを自分の目で見たことで、この地球の人々が安全に暮らせる清潔な環境や平和をますます願いたいと思います。ところが、私は一部の日本人と同じ心配があります。それは日本経済の急成長によって民族文化の特色が失われ、若い世代の風俗が変わり、環境破壊等が起きていることです。

私の今まで述べたことは十分ではなく、他の人の考えと一致しないかもしれませんが、それは日本で短い期間に感じた正直、素朴な感想です。

これはすべてJICA、協力団体および地方関連団体による綿密かつ合理的に配慮されたプログラムのおかげです。私はヴィエトナム青年の一員として、この感想を得られたのです。「青年招へい事業」の活動で、過去から現在に至るまで桜の国といわれる日本や人々のことは私の心に深い印象、美しい思い出を残しています。私たちにとって、この

活動はたいへん有益です。

最後に、日本での上すべてのことについて、感謝いたします。そして日本とヴィエトナムの青年の友情がますます発展するように願います。

■太平洋諸国・地域

■クック諸島

ハイライト

アレキサンダー・タマ・ヘンリー
(太平洋混成 公務員グループ)



日本に到着し、目にした光景は私の考えていたとおりだった。おびただしい数の車、高層ビル、近代化、高度化した社会。その一方で、慎み深い日本人が見せてくれた友好的態度、素晴らしい笑顔は全く想像していなかった。

合宿セミナーから本当の楽しみが始まった。各国の民族音楽やビールで大いに盛り上がった。合宿セミナーは私たち公務員グループにとって最高に楽しい週末となったが、日本人参加者にとっても同じだったと思う。富士山の麓で最高の環境のもと、新しい友を作り、他国の文化に対する洞察を深め、陽気に振る舞うことができた。「交流の夕べ」の翌朝は布団から出るのがつらかった青年が何人かいたに違いない。日本人参加青年と別れたときは感動で胸が締めつけられる思いだったが、このあとも日本国内で多くの素晴らしい経験をすることになる。

私は個人的には愛媛県への訪問が最高だった。これは愛媛県の元青年海外協力隊員の努力の賜物である。ホームステイはとても楽しい経験だったが、やはり別れは悲しかった。ホームステイを企画した方に心から感謝する。言葉の問題はホームステイを楽しむうえではなんら障害にはならなかった。

紙面が限られているので、一言述べて終わりに

したい。日本人との交流、和食をはじめいろいろな面白い経験ができた。

本プログラムのますますの発展をお祈りいたします。

■太平洋諸国・地域

□フィジー

日本一夢の国

ジェイスーン・ニシャ・カーン
(公務員グループ)



1996年6月26日、私は「青年招へい事業」に参加するために日本に到着しました。それから1カ月が経った今、私は日本人の時間への正確さ、伝統と文化を重んじる心、そして仕事への熱心さが日本を成功へと導いたのだと確信しました。すべてが“フィジータイム”で動く国から来た私にとっては日本の能率的な仕事のやり方にとっても感動させられました。

1カ月の滞在期間中に愛知県、一宮市、名古屋、京都、広島などいろいろな都市を訪れました。確かに日本人と外国人の間に言葉の壁はあるけれど、人々の親切と、友情、やさしさには壁などないことを学びました。ホームステイ中に私はホストファミリーから温かいもてなしを受け、友情を育むことができました。日本での体験の一つは、私がホストファミリーのためにインド料理を作ったときのことです。家族全員がフィジー人がするように指を使って料理を食べてくれたのには本当に感激しました。

私の旅行のハイライト……いえ、多分私の人生においてもハイライトとなったのは、広島を訪れたことです。広島で戦争の残骸を見ると、戦争が引き起こした痛みと、破壊にもかかわらず日本がみごとに復興し今日のような繁栄を享受するにいたったことが読み取れました。

日本人の若者との交流ではいろいろな話題について話し、私がフィジーに帰ってからも役に立つ新しいことをたくさん学びました。

日本は単なる最新技術の国ではなく、温かい友情にあふれ、伝統、文化をもって21世紀に向かう豊かな国です。

1カ月の日本滞在中に私はこの国で親切なもてなしをうけました。しかしながら、ある夜私が東京を歩いていたとき、道路で寝ている何人かの人に気づきました。日本政府はこれらの苦境にある人々をぜひ助けてあげてほしいと思うのです。なぜならこのような情景は夢がつかられ、世界がその高度技術を讃える美しい国、日本のイメージを著しく傷つけるからです。

■太平洋諸国・地域

□パプア・ニューギニア

日本で発見したこと

ビヴァリー・サンガマツト
(公務員グループ)



大きな経済的発展と高度な技術開発を成し遂げた日本の成功の秘密は何か子供の頃から知りたかったと思っていた。今回「青年招へい事業」に参加し、4週間日本に滞在して、今まで思い描いていた日本とはまったく違う真の日本の姿を知ることができた。

4週間前初めて日本の地を踏んだとき、私は一言も言葉を話せず、一言も言葉を聞き取れない自分を発見していた。この日本語という言葉の壁がかえって私を奮い立たせた。50年前戦争によって完全に破壊された日本が、どのようにしてここまで復興したかという学生のときからの疑問に対する答えを、今回の日本滞在中に自分自身で発見しようと思ったのである。

未来の発展をめざす強い意志。そしてそれを成し遂げる責任感。もちろん常に経験に学ぶことを心がける。自己の発明には誇りをもち、特許登録をすることも忘れない。日本人は自然とうまく調和し、日本の伝統や価値を護りながら、奇跡ともいえる経済発展を成し遂げたのである。

最後に、日本という美しい国と日本人という温かい人々を知ることができたこのような貴重な機会を、私たち太平洋諸国の若者に与えてくださった、JICA、そして他の団体の関係者の皆様に感謝したい。日本で過ごした日々は本当に楽しかった

し、何より素晴らしいのは一生付き合っていける友人ができたことだ。平和と再会を祈って。

万歳！ 万歳！ 万歳！

日本での日々

ジョセフ・エカ
(教員グループ)



このたび、私の1カ月に及ぶ日本滞在について一人の外国人として語る機会を与えられたことに深く感謝したい。

日本に到着する45分くらい前のこと、「左手をご覧ください。日本で一番高い富士山が見えます」という機長の声が聞こえてきた。そのアナウンスに、私は急いでその方向に視線を向けた。目的地に近づきつつあることを知り、私たちは抑えがたい興奮を覚えた。カンタス747便が成田空港に着陸するために下降を始めると、その下方に美しい緑の風景が広がっていた。7時間の空の旅を終え、私は安堵感にひたった。

どの国もそうかもしれないが、日本滞在中、この国独自の文化や国民性は、その地理的条件や住民、気候によって形づくられるところが多いと感じていた。日本はかつての農業社会から、今日の工業社会や政治体制へ移行するにあたって大きな転換を遂げた。また第2次世界大戦以降、日本政府とその国民は、世界平和を各国に強く訴えてきた。日本は過去の過ちを繰り返さない決意である。

日本人は日々の生活でも、時間に正確で勤勉である。日本の国土はパプア・ニューギニアより小さいが、人口が1億3千万人近いのは驚きである。

東京だけでも1千万人以上住んでおり、これはパプア・ニューギニアの人口の2倍以上に相当する。高層ビルも林立し、その中にはレストランや店、役所、住居などがひしめいている。東京の道路はいつも人でいっぱい、時間に遅れまいと競うように歩いている。道路も込んでいて、渋滞もしばしば見られる。

日本人の主食は米で、野菜も豊富である。海産物も好きでよく食卓にのぼる。生の魚も食べる。私は最初のうち箸を使うのが苦手だったが、お腹がすいてはたまらないと、一生懸命覚えて使いこなせるようになった。

困ったのは、英語を話せる人が少ないこと。そのため日本人との交流は、通訳を介して行うことが多かった。日本の英語教育は中学から始まり、全教科が日本語で教えられている。

最後に、パプア・ニューギニアをはじめアジア・太平洋地域の第三世界との関係強化のために、膨大な資金を提供してくださる日本政府に対し、厚くお礼申し上げたい。またお世話になったコーディネーターの皆さんにも感謝している。これらの方々のおかげで、私たちの日本滞在はとても楽しく実りのあるものとなった。

ドウモアリガトウゴザイマス——サヨナラ。

■太平洋諸国・地域

■ソロモン諸島

内側から見た日本

アセリ・ヤランゴノ
(太平洋混成 教員グループ)



このプログラムに参加する以前から、私自身は日本についてかなりの知識をもっていたと思う。すなわち日本の歴史（特に第2次世界大戦について）と今日に至る経済復興と世界に占める現在の日本の政治的・経済的地位についての知識である。

西欧式教育システムで教育を受けた私は、(他の参加青年と同様に) 日本で1カ月にわたるプログラムをうまくこなせるかどうか、大きな不安とためらいを感じていた。しかし、私の日本についての知識や懸念は誤っており、日本での生活体験がなかったからだと思われる。現地プログラムを通じて日本での滞在に向けた心構えができ、私にとって非常に役に立った。

日本での日々が過ぎていくにつれ、日本の歴史・文化・伝統・人々について、外の世界に知られていない点が多々あることを実感した。合宿セミナー、ホームステイ、見学旅行プログラムを通し、私の知らなかった日本について大いに知識を深めることができた。日本の食べ物（刺し身や他のなまもの）、町や都市の清潔さ、相手に対する敬意。「ありがとう」や「すみません」の言葉やお辞儀を交わすことが、毎日の生活の中心を成していることに深い印象を受けた。

ホームステイはプログラムのハイライトだった。まるで未知の世界へ踏み込む冒険のようだった。

しかし、日本語授業・現地プログラム・合宿セミナーや他のプログラムで学んだことの実地テストでもあった。言葉の障壁にもかかわらず、常に大きな満足感を味わった。言葉で説明できないときはどんな場合でも身振りで示し、また日本語テキストを参照して状況をはっきりさせた。そうするといつも笑い声が上がって、理解してもらえたのだ。この短期間に培った真の友情によって、私は日本人が遠慮がちなのは言葉やコミュニケーションの障害があるためだけだと分かった。短い日本滞在中に、私は新しい友達を作ることができた。

多くのことを日本で経験したが、時もそのひとつだ。諺にもあるように、「何事にも終わりはある」（たとえそれが良いことであっても）。だから、私の日本滞在中にも、この文章にも終わりはあるのだ。すべての参加青年の素晴らしい経験は、この言葉以外では締めくくれないだろう。

「ありがとうございました」

■アフリカ

■アルジェリア

日本との短い出合い

ミムニ・ウアヒバ
(経済開発公務員2グループ)



日本とアフリカ諸国の間の「青年招へい事業」に参加しましたが、人的交流の面においても経済の知識を得るうえでも実り多い経験となりました。

さまざまな企業や行政機関を訪問し、こうした組織がどう管理・運営されているかについて広範囲な理解が得られました。また日本人との交流、特にホームステイは特別な性質のものでした。合宿セミナーでは時間が限られていたにもかかわらず、アフリカ人グループと日本人グループとの間の議論を通じて確かな成果が得られることが分かり驚きました。

印象的だったのは日本人家庭で熱烈な歓迎を受けたことと、すぐに互いに打ち解けることができたことです。こうした交流を通じて日本人のなかに人間的な気高さを見いだすことができ、これが日本社会の調和の裏付けとなっているように私には思えました。

来日以来、日本人のヒューマニズム、もてなしの心、寛大さといった3つの価値観に気づきましたが、向上心に富んだ国民すべての期待に応えるためには、こうした価値観は必要不可欠なことなのだと思えます。

日本が今日経済大国であるのは、幾世紀にも及ぶ歴史と模範となる文化によって象徴される計り知れない豊かさをもっているためだと思いま

した。この日本滞在によって文化も含め、包括的な視野で日本を理解することができました。日本人は日本文化に対して強い執着を示しますが、これは自分たちの独自性を保とうとする意思の表れなのでしょう。

日本文化では礼儀、もてなし、仕事への熱意を基本原則として教えますが、これは私たちの宗教であるイスラム教でも教えていることです。

日本をもっと理解したいと思います。またできることならば、他のプログラムやアルジェリアの発展に役立つような技術研修にぜひ参加したいものです。

日本人の努力、寛大さ、人間性は賞賛に値するものであると思います。

■アフリカ

■ヘナン

日本の息づかい

チャビ・タラタ・マリアム
(女性教員2グループ)



日出づる国。

人々がほめそやすのを私は聞いていた。

告白してしまえば、私はずっと疑っていた。資源も何もない国が、そして絶えず地震に揺れている国が、どのように成功への道を駆け上ったのだろうか。

降って洩いたように友情と善意に満ちた機会が訪れ、私はその国を知ることができた。ああ、神様！ この国は、生き、その息づかいさえも聞こえる。

東京、岡山、広島、大阪、工場の構内、港や空港、学校やそれぞれの職場、どこもかしこも向上しようとする活力で溢れている。そこに住む果敢かつ緻密な人々、愛すべき誠実で誇り高き市民たちとともに、この国が動き、息づく。

私は、どの局面においても、これらすべてを見たのだ。私を揺さぶり、麻痺させ、再び揺さぶり、麻痺させる、この思い。この気持ち！ 驚きと疑いに満ちている、そして感嘆と同時に恥ずかしさでいっぱいこの気持ち。自国の現状を慮る。私たちがこんなことができるのだろうかという疑いの気持ち。私たちには、等しく理性が授けられている、それに最初の間はアフリカで誕生したというのではないか。

私がこんなことを考えている間にも、日本は、

この国は、明確な未来図を描き続ける。バランスと調和と活力を生み出しながら。この国の成功は、老人たちの作品だ。若い世代は軽佻浮薄に見えるのだが、彼らはこの作品の創作にかかわっているのか。彼らが勞せず譲り受けたものより徳や知識を引き出すことができるのか。大丈夫！ 必ず、彼らは、立派にその布を織り上げるにちがいない。彼らは、常に困難に打ち勝つ方法を見つけ出すにちがいない。宗教や言語、肌の色の問題を避けながら、この国は驚愕すべき道を歩み続けるであろう。

そう、日が昇れば、睡魔も怠惰も悪徳さえも消えていく。これが日の出の真実。この国は、何度も何度も世界を驚かせ、これからもきつと、ずっとずっと世界はこの国に驚嘆し続ける。

SAYONARA、素晴らしい国！

■ アフリカ

■ エジプト

日本探訪

ワフェ・エル・サイエッド・ソライマン

(女性教員1グループ)



私は10代のとき、ひとつの夢をもっていました。それは3つの国、アメリカ合衆国、ロシア、そして日本を訪れることでした。アメリカ合衆国とロシアは当時の超大国であり、私がそう思うのも当然でしたが、日本については特別の理由がありました。それは一国のすべての財産を使い果たしてしまうほどの長い苦しい戦争のあとに、まるで魔法のランプから抜け出たような変化を遂げた偉大な巨人にぜひ会ってみたいと思ったのです。私にとって、これはまさに奇跡でした。この奇跡を起こし、日本を世界の超大国と対等ならしめた日本人にどうしても会いたいと思ったのです。

私はいつも日本人を尊敬し、崇拝してきました。実際に日本の方にお会いしてこの気持ちはますます強くなりました。驚異的な技術の発展にもかかわらず、日本人は他の多くの国が維持できなかった生活上の道徳的、精神的なものを失うことがありませんでした。現在でも日本人は、老人、貧困者、そして愛を必要としている人々に温かい救いの手をさしのべています。これは私が見た広島原爆資料館の写真で明らかです。写真は生存者がいかに助けを必要としている人々を助けたのか、また次世代に対して、取るべき規範を明示しています。

私は、日本人がどんな人々であるのか知りたい

とっていました。「きっと何か違うものを持っているにちがいない」と、自分自身に語っていました。日本人を理解したとき、それが何であるのかわかりました。不屈の精神でした。日本の10代の学生が長くて疲れる学校での一日に耐えることができるのも、この不屈の精神によるものです。

また私は、ホームステイを悪夢のように恐れていたことを思い出します。自分の知っている言葉をまったく解さない人々とどうして話をするのでしょ。う。い。っ。た。い。ど。ん。な。会。話。が。で。き。る。の。で。し。ょ。う。し。か。し。驚。く。べ。き。こ。と。で。す。が、私はホームステイが大好きになりました。他の仲間たちが、同様に大喜びでホームステイから帰って来るのを見て、私はもっと驚いてしまいました。ホストファミリーの方々がたいへん温かくおもてなししてくださったのです。居心地がとてよく、私たちの不安はすぐに消え去ったのでした。ホームステイはたいへん楽しく幸せな経験でした。なぜなら新しい友人、異なる文化、慣習をもつさまざまな国がやがてひとつの世界に結び付くという、同じ人間らしい考えをもつ友人を得ることができたからです。私は高校を訪問したとき、高校生が愛情あふれる目で、唇に「お別れがづらいです」のメッセージを浮かべて、さかんに手を振ってくれた光景が忘れられません。

私は日本でこのような素晴らしい経験をさせてくださったエジプトならびに日本の皆様に対し、どのように感謝したらよいか言葉が見つかりません。最後に日本の皆様に申し上げたいことがあります。皆様は日本を誇りに思うべきです。そして皆様自身を誇りに思うべきです。なぜならこの国をこんなすてきな国につくりあげたのは、皆様自身なのですから。

■ アフリカ

■ スワジランド

ニッポン—日本の本、太陽の昇る国

マドンセラ・リンディウエ

(経済開発公務員1グループ)



羽田空港からホテルに向かうバスの座席に沈みこみながら、バスの中に聞こえてくるのは、「はあ〜」とか「ふう〜」というため息だけだった。このため息は、興奮と冒険を呑み込み続けた30日間の結果だ。そして、「青年招へい事業」による私たちの日本訪問もとうとう終わるということでもあった。

「お元気ですか？」と、コーディネーターの吉田さんの声。「はい！ 元気です！」というコーラスが、ただちに彼女の後ろからはねかえった。本当は、ちょうどそのとき、私たち全員が「元気です」という状態ではなかった。東京までの最後の数分間、天気の良い揺れに揺れた飛行を体験したばかりだったのだ。けれども、そう、最初から最後まで、私たちは皆「元気です」だったし、完璧に素晴らしい日々を過ごしたのだった。

さて、この1か月はどこに消え去ったのか。ロンドンを出発する前、壮行会にて、日本の代理大使が、「日本に行くあなたがたをうらやましく思う。今、日本は秋。夏の緑の葉が落ちて、色彩豊かに変わる最も美しい季節を経験するでしょう」と挨拶した。この言葉に魅せられたものの、まだ未知の人々にも未知の文化にも出会ってなかったため、私は、少し不安な気持ちだった。

西湖(富士山のふもと)、徳島、京都、広島と旅

してみて、私はなぜこの国が「ニッポン」と呼ばれるのかを理解した。日本の生活様式は、この地球の豊かさをさらに高めるためにハイテクと人間と自然がとても美しく相互に支え合っているのだ。

西湖の「くわるび」という名の宿に向かってドライブしている道中、私たちは、美しい景色に目を奪われた。大きな湖に空高くそびえる火山、美しい秋の葉っぱの色—茶色、黄色、オレンジ、赤さび色、赤、そして薄い緑色の影。私はすぐに「これはすごい。なんて壮大なんだろう！」と感動した。そして、まもなく徳島—河と山と滝の国—想像を超えた美しさを体験したのだった。

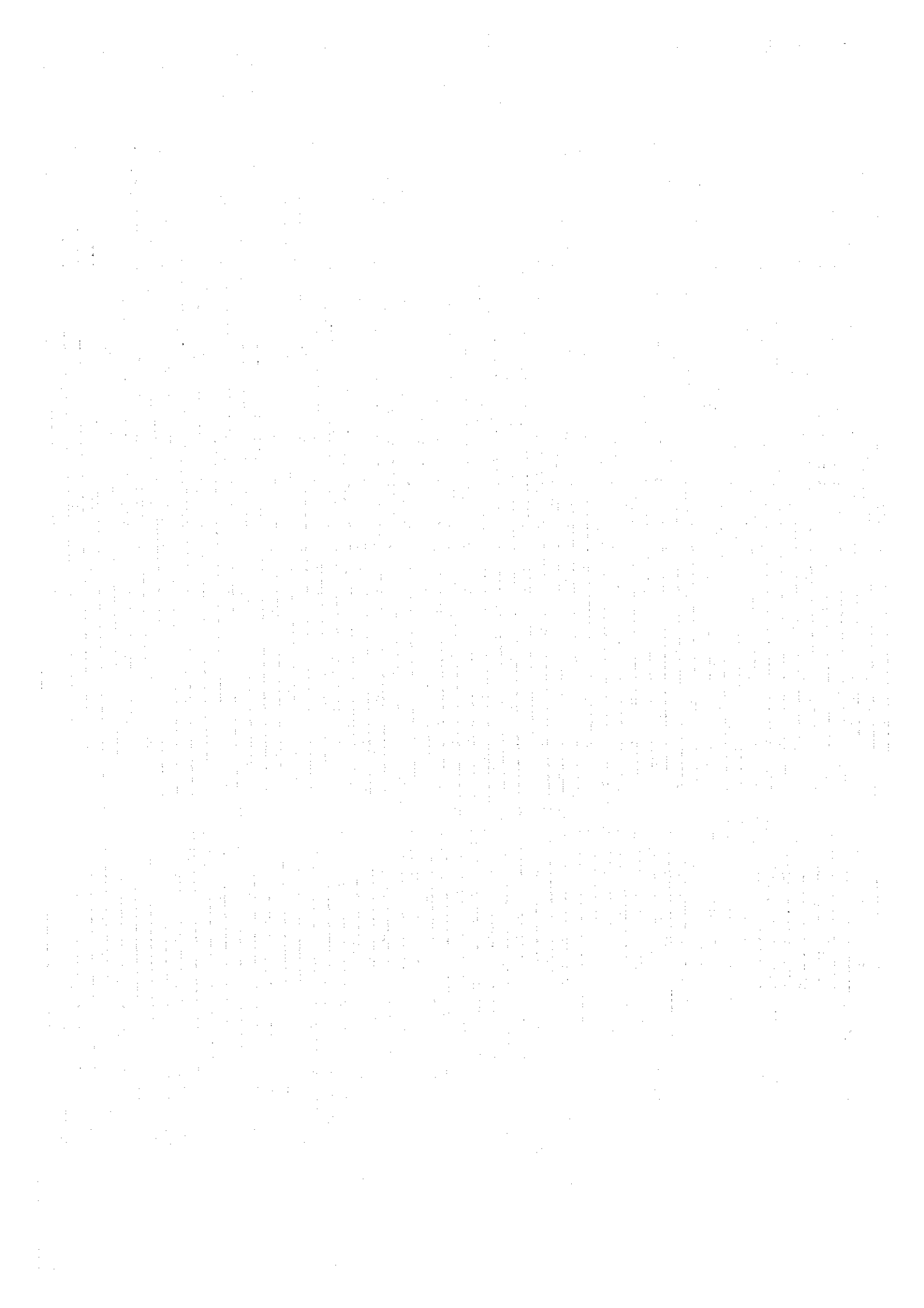
広島。「灰の中から生まれた驚くべき美しい都市」としか表現できない広島。そうなのだ。「ジャパン」は「ニッポン」(日本の本)なのだ、日出づる国なのだ！

広島原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、原爆ドームまでやって来て、江戸東京博物館を訪問して以来、私のなかで少しずつつゆつくりと形づくられていった日本人の心が、ようやく完成された絵となった。今では、もう私は完全に理解したことがある。それは、私だけでなく、他のメンバーも同じ意見だが、日本人は平和を願い、この平和を全世界に実現するために全力を尽くして誠実に努力している人々だ、ということだ。そう、彼らは戦争という無残な厳しいレッスンから、他の国々との肯定的な交流と調和のなかで生きてゆくことの大切さを学んだのだ。

コーディネーターたちや、日本人参加者、ホストファミリーたちと過ごしてゆくなかで、日本人の知られざる面が明らかになった。私たちは、ユーモアあふれるくつろいだ雰囲気を楽しんだ。もう私たちにとって、日本人は、スーツを着て残業ばかりし、常に仕事のことしか考えないまじめなだけの人々ではなくなった。ユーモアももちながら勤勉でもあることを発見したのだった。

理解と尊敬をもって人と人が出会うとき、人生

は真に豊かなものになる。まさにそうなのである。日本とアフリカ諸国の間にあった大きな隔たりに橋がかけられたのだ。この招へい事業で、かずらのつるで作られた橋よりも強い丈夫な絆が築かれたのだ。私の望みは、この絆が明確に美しく、時という距離を超えて、いつもかずら橋の上に見えることだ。



3. 合宿セミナー参加日本青年の声

心に残るメロディー

亀井 建人
(会社員)

♪ Tanah airku INDONESIA ~ Negri elok amat kucinta ~

合宿セミナーが終わったあとも、私の胸に快く響いてくるメロディーがあります。そう、インドネシア青年を迎えるときに、日本青年みんなて練習した「インドネシアの祖国をたたえる歌」です。口ずさんでいると、あの異国の青年たち一人一人の顔、声が楽しい思い出とともに鮮やかに蘇ってくるのです。

不思議だなと思ったこと、「え〜っ!」とビックリした思い出などがこの曲に全部つまっているような気がして忘れられません。

合宿セミナーに参加する前は、正直いってとても不安でした。英語も満足に話せない自分が、相手の国の青年とうまくコミュニケーションできるだろうか、ホストとして彼らに満足してもらえるようなもてなしができるのだろうか。そして、宗教上やってはならない行為(左手を使うなど)が出てしまったりはしないか、など心配なことばかりでした。

しかし、そのような不安はインドネシア青年と実際に会っていろいろな話をしていくにつれ、完

全に消えてしまいました。コミュニケーションするのも、簡単な英語と身振り、手振りでも十分でしたし、何にもまして、私が一番うれしかったのは、彼らが私たち日本青年と同じような感性で喜んだり、笑ったりしたことでした。そうなれば当然会話もはずみましたし、当初、少し長いかなと思っていた合宿セミナーもあっという間に過ぎていきました。

いま、私は海の向こうの素晴らしい青年たちと素敵な時間をともに過ごせたことを誇りに思っています。

幸せな時間

赤井 由香
(会社員)

少しの緊張とともに初めて参加した合宿セミナーは、本当に楽しく、多くのことを考えるきっかけとなりました。

今回は、「交流の夕べ」をお手伝いできる機会に恵まれ、いろいろな場面を楽しむことができました。いちばんよく話したことは、ゲームの種類や内容についてでしたが、数多く話し合いの場を持ったせいか、「日本人はstrictだね」と言われたよ」と日本青年側のMC(=Master of Ceremonyとフィリピン青年に教わりました)であった高山さんは、笑っていました。言葉、文化そして個々人のものの捉え方の違いのおもしろさを感じました。

交流の夕べで、私の心に最も残っているのは、

フィリピン青年の歌です。聞いている間のあの雰囲気、そして時間が止まっているかのように感じたあの感覚。胸が熱くなった人は少なくなかったことでしょう。暮らしている場所が違い、言葉を完璧に分かり合えなくても伝わるものってあるのだなあ、と思いました。

交流の夕べが終わり、私が部屋に戻ったのは11時過ぎでしたが、みんなまだ起きていて、浴衣を着てみたいと言ってくれました。浴衣を着て、写真を撮り、みんなとても喜んでくれて、本当にうれしく思いました。交流の夕べのときは、着てみたいとはひと言も口にしなかったので、「興味がないのかな?」と思っていたのだけれど、口に出さなかっただけのように、「みんな奥ゆかしい人なのだ」と感じました。

最後になりましたが、貴重な時間を共有できた参加者の方々、そして陰でご尽力くださった多くの方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。私は、幸せです。

共に語り、歌い、踊って深めた友情

可知 幸則
(教員)

今回この合宿セミナーに初めて参加させていただきましたが、非常に中身の充実した有意義な合宿であったと思います。そもそもこの青年招へい事業の目的は、「ASEANをはじめアジア、太平洋、アフリカ諸国などから将来の国造りを担う青年をわが国に専門分野別に1カ月間招き、それぞれの分野について学ぶとともに、ホームステイ受け入れ家庭などとの幅広い交流を通じて相互理解を深め、信頼と友情を築くこと」であり、この合宿セミナーはまさにその目的に沿った理想的なプログラムであると思います。また、国造りの基本は教育であると私は考えており、そういう意味で

今回の教員合宿セミナーは非常に重要な役割を担っていたのではないのでしょうか。

2日間にわたるディスカッションでは、両国が抱える教育問題や社会問題等について話し合いました。習慣や制度は違っていても根本的には似たような悩みや問題を抱えており、お互いに何かを学びとろうとする姿勢がみられ、熱のこもった討論が展開されました。討論していくなかで私は次の点を再認識するにいたりました。①日本人はまだよいところをたくさんもっているが、最近それが徐々に失われつつある。②大人たちが学校や家庭や地域社会を通じて子供たちに日本人のもつ美德を正しく伝える義務と責任がある。③ひいてはそれが文化の継承になる。

このように文化というものを身近にとらえることができました。

公開シンポジウムが終わり、緊張がほぐれた最後の夜は、昔からの友人のように肩を寄せ合い共に歌い踊りました。翌朝、バスの中からいつまでも手を振って別れを惜しんでくれた姿は忘れることができません。こうした友情の輪がもっと広がるといいと思いました。

ヴェトナム公務員との合宿セミナーに参加して

寺田 勝嘉
(公務員)

ヴェトナムと言えば、今まで、ヴェトナム戦争、南北統一およびドイモイ（「刷新」の意）しか知らなかったように、私にとっては遠い国であった。また、言葉はもちろんのこと生活習慣等も知らないということもあり、一抹の不安があった。

しかしながら、3日間の合宿セミナーを通じてこれらの不安が払拭されるとともに、いろんなことを発見し、多くのことを学ぶことができた。

まず第一に、ヴィエトナムの人は心が優しく、明るいということであった。

初めて顔を合わせたセミナー会場への移動バスの中でも、歌を歌ったり、自分の国のことを話したりという状況であった。特に、サブリーダーのグエン・タイ・フンさんには圧倒された。ヴィエトナムの民謡などいろいろな歌が次から次へと流れるように出てきたのには、ただただ感心した。

第2は、なんでも吸収しようとするバイタリティーである。

日本のことをなんでも吸収し自分のものにより、今後の仕事あるいは生活のなかで生かそうとする前向きな姿勢には感心した。参加者のほとんどが、政府職員および党職員ということもあり、国のためという意識が特に強かったように感じた。

第3は、グループ討議のなかで感じたことであるが、日本人よりも社会的慣習に対する考え方が厳しいように感じた。テーマについての討議を通じてヴィエトナムの職場環境などを知ることができ、有意義な時間をもつことができたと思っている。

最後になるが、このセミナーを通じて多くのヴィエトナムの人と知り合うことができた。今後は、同じアジアの一員として、友好の輪を広げていかなくてはと強く決意したところである。

また、長崎県は日本の最西端という地理的条件を生かしてアジア各国との国際交流を積極的に進めていることから、ヴィエトナムを始めとして東南アジアとの更なる交流を推進していきたいと考えている。

幸せなら態度で示そうよ

後藤 志磨子
(会社員)

日本人は自己表現が苦手です。

それこそが日本らしさだ、とも言えるのですが、世界レベルで見て、相手に何かを“伝える”手段は、やはり未熟なように思えてなりませんでした。

今回のマレーシア青年との交流でも、歓迎の気持ち、会えてうれしい気持ちは同じくらい持っているはずなのに、「コンニチハ。ワタシノ、ナマエハ、〇〇デス。ヨロシク、オネガイシマス」と笑顔で話しかけてくれるマレーシア青年に対し「Hello. Nice to meet you.」の英語しか準備していなかった私は、申し訳ない思いでいっぱいでした。

相手に好意を示したい。相手と親しくなりたい。——それなら、なぜ自分から相手に向かって一歩踏み出さないのか？ 立ち止まってほほ笑んでいるだけでは、自分の気持ちは相手に届かないのだ。受け手に回るのではなく、相手に働きかけてはどう？

そのことに気づいたのは私だけではなかったはずです。自己紹介のときにはマレーシア側に圧倒されていた日本青年も、しだいにマレー語を覚え、自分から踏み出し、あっという間に私たちは仲良くなりました。国も言葉も違うけれど、同じ青年、同じ人間として連帯感を持つことができました。たった3日間でこれほど親しみを感じるとは、参加する前には思ってもいませんでした。

一緒にセバククローやドッジボールをしたり、歌ったり踊ったり……楽しい思い出はたくさんありますが、私には花火のときに誰からともなく歌いだした「幸せなら手を叩こう」が特に印象的でした。同じメロディーを日本語で、英語で、マレー語で、ジェスチャーを交じえ、改めて歌詞の意味をかみしめながら歌ったあの夜。

Terima kasih!

カンボディアの教育と将来

井手 直子
(学生)

カンボディアといえば、世界文化遺産のひとつであるアンコール遺跡群をもち、1993年の国連監視下の総選挙以来復興を続けている国である。この国で今最も必要とされているのは、やはり教育である。今回の合宿セミナーは、カンボディアを根底から支え未来の指針を与えるであろう先生方と、意見を交換し交流を深めたいへん良い機会となった。

カンボディアにおける現在の教育のあり方といえば、学校の数不足、先生への待遇は悪いため、なり手が少ない。教材も十分ではない。カンボディア政府の教育に対する見方には改善が望まれる。しかし先生方はいつも明るくほがらかで、討論会となると真剣な眼差しで質問をなされた。「生徒に日本のことを教えてあげるんだ」とすべてを吸収しようとする姿、そのような教育に対する熱心な態度に、将来の明るいカンボディアを見るような気がした。今回の先生方との出会いを生かして、1997年にはASEANにも加盟し、これからも発展していくであろうカンボディアと、今後も互



いに協力しながらつき合っていきたいと思う。最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった青少年育成国民会議の方々をはじめ、関係者の皆様方にお礼を申し上げたい。

日老友好

三品 あおい
(学生)

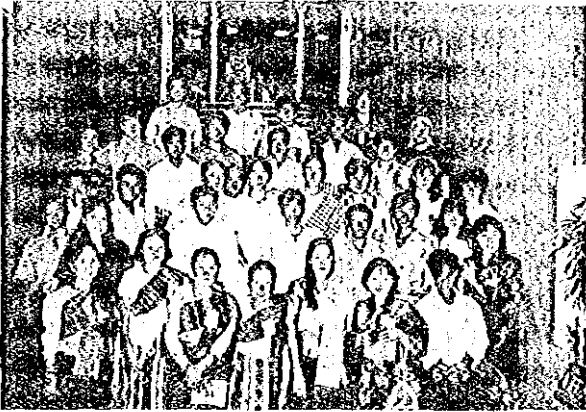
ラオス教育グループ合宿セミナーの3日間は実に有意義なものとなった。当初私はラオスについての知識がほとんどなく、さらに教育について討論が行われると聞いて、緊張と不安でいっぱいだったが、その思いは最初のボウリングで吹き飛んだ。その夜の交歓会では日本人はラオス語でラオス人は日本語で自己紹介をした。このとき、お互いに通じ合おうという気持ちが一番大切なことに改めて気づいた。

翌日は終日ずっと討論をしていた。ラオスと日本の教育事情、それに関する質疑応答や意見の交換が活発に行われた。施設の問題、教育問題、カリキュラム問題等について、社会背景も含めて日本と比較した。

しかしそのなかでも特に私にとって興味深かったのはラオスの大学生についてである。低い大学進学率のなかで狭き門をくぐってきた彼らは将来が約束されている反面、周回のプレッシャーをかなり背負っている。アルバイトなどする余裕はなく、つくづく日本の大学生の自由奔放さを痛感した。

意見交換した後での交流パーティーは大いに盛り上がった。ラオス青年は民族衣装で、日本人女性数名は浴衣で登場。初めて見るラオスの踊りや歌は私たちを思わず踊りに誘うような、そんな開放的で明るい雰囲気をもっていた。

最終日にはバレーボール大会を行った。ラオス・



日本混成チームで、横のコートでは自由にバスケットやバドミントンをして遊んだ。彼らは国を超えて私たちと同じ空間と時間を共有した。

この3日間で日老友好の絆がより強く結ばれたことは事実であろう。そして私は再びラオス青年のあの明るく温かい国民性に包まれて彼らから聞いたさまざまなラオス事情を実際にこの目で見に行こうと思った。

太平洋混成(教員)合宿セミナーに参加して

奥平 文子
(英語講師)

世界地図を広げてみると、今まで漠然と眺めていた太平洋諸国のひとつひとつの国がくっきりと意味をもって感じられた。合宿セミナー参加後のことである。世界の国々の教育に関心がある私にとって、今回の合宿はたいへん有意義であった。ディスカッション、スポーツ、交流の夕べ、そして夜遅くまで一緒に歌い、語り合い、ゲームをしたこの合宿は、2泊3日の短さとは思えぬほど、密度が濃く充実しており、太平洋諸国と私自身のなかの距離を縮めてくれた。日本の学校訪問をしてみず驚いたことは、校庭があることであったとクック諸島の青年が語っていた。島では、校舎の

外はヤシの木々や海が広がっており、また暑さを凌ぐための昼寝の時間がある。2700人余りの人口のニウエでは、公共の交通機関がない。新宿駅で多くの人々が互いに挨拶も交わさずに通り過ぎていく様に、日本人はなぜ自らを忙しくしているのか、と目を丸くしていた青年。母国語を学校では教えないと語っていたのは、ソロモン諸島の青年であった。母国語は地域によって異なる“生活”手段であり、その数は87にも及び、学校では英語で学ぶのだという。太平洋諸国における共通性はあるものの、国や島によってそれぞれの文化があり、同じ国のなかでさえも島によって慣習の違いがある。話せば話すほどに奥が深く、男女間の問題、結婚や死、日常生活に関して等、話は広がっていった。彼らの文化を学ぶ一方で、自国のこともきちんと説明できなければならないことも、改めて痛感した。青年たちからいただいた貝殻のアクセサリや腰蓑を手にとると、南国の風とともに、彼らの陽気な歌声と笑い声が聞こえてくるようで、今度は私が彼らの国を訪問したいと願っているこの頃である。

合宿セミナーを振り返って

阿部 芳人
(小学校教諭)

「うわあーっ！ 人間っていいな。友達って素敵だよな。PNGの仲間たちよ、君たち最高だよ」。これが僕の合宿セミナーにおける感想です。さて、今回の合宿での、初日はレク大会です。PNG・日本混成4チームに分かれてのビーチバレー大会。みんなもう言葉の壁なんて取っ払っての大盛り上がりで久しぶりに興奮したなあ、ホント。夕食を済ませ、花火大会、やんやんやの大喝采のうちに今度は大縄跳びやらバリ・マナ・ポトト(これはPNGの遊び)、ほかにもいくつかのレクリ



エーションを日本とPNGがそれぞれ出し合い、交流を深めました。夜も深まり、「おやすみなさい」と言ったわけですが、僕らはまだ若い！ 本当？ 夜中の3時頃までお互いの家族のことや文化など語り合いました。

忘れてましたがきちんとやりましたよ、ディスカッション(2日目にバッチリとネ)。お互いの教育環境や教育観、子供たちのこと、etc、とってもよい勉強になりました。私たち教育に携わる者として、「子供の可能性を信じること、夢は必ず実現する」この2つは環境は違っても忘れないようにしましょうネ。

お互い知り合って2日目の夜なのにもうお別れパーティー。日本人側は「七夕様」について、PNG側は民族ダンスや歌等の出し物をして別れを惜しみました。そうそう皆さんそれぞれ民族衣装や浴衣を着て、なかには柔道着を着てスリッパ持って踊ってた変なやつ(あっ！ これ僕のことか)もいたっけ。

何ほともあれ、楽しく、そして真剣に教育について話し合えた充実した3日間でした。PNGのみんな！ 今度は僕らがPNGに行くからそのときはよろしくお願いしますよ。

異文化体験

石坂 正継
(教員)

モルディヴ、ブータンの青年教師たちとの2泊3日の合宿は、イスラム世界、チベット仏教世界のの人たちと寝食を共にしたことのない私にとって、膝を突き合わせて語る魅力的な企画であった。

歓迎レセプションも終わり、梯形山のウッドビレッジに着いたのは午後7時頃。オリエンテーション、部屋割りを済ませ、各棟に入った。日本人4人、モルディヴのアバス、ブータンのジャンベの6人。ぎこちない会話が始まった。なまりのある英語は英会話の得意でない私にとってますます、意思疎通を困難にしていた。会話が切れないように、用意してきた日本の玩具をバッグから取り出しては、実演して見せた。パソコン、剣玉、折紙、花札、竹とんぼ、シャボン玉などなど。彼らが一番気に入ったのは意外にも剣玉だった。根気よくチャレンジするうちに、すぐにマスターしてしまった。笑顔が交わるようになると、日本のつまみ、モルディヴの缶詰などを出し合って小宴会。やはりイスラム世界の人には酒に手をつけなかった。また、スナック菓子、カップヌードルも、いちいち豚の脂が使っているか私たちに聞いた。宗教によって生活が規制されている一場面を見ることができた。ブータンのジャンベは首からグライ=ラマ14世の肖像を下げていた。また、青い石の指輪をしていたが、これもラマ教信者の証拠と言っていた。それぞれの国の教育事情の話し合いのなかでもしばしば「国のため」という言葉が聞かれたが、日本人の多くが忘れてしまった宗教観や愛国心を考える良い機会であったと思う。

インド(理数科教員) 合宿セミナーに参加して

寺田 貴子
(会社員)

「みんなが同じ湯船に入るなんて、汚くはないの？ タカコ」。彼女たちはちょっと不安気に私にそう尋ねた。温泉に入ってみよう勧めていたときのことである。私の脳裏をガンジス川の風景がかすめた。洗濯し、排泄し、さらには火葬の灰をも流すその同じ川で、口をすすぎ、体を清める聖なる川……。私は思わず、ガンジス川に想いを馳せた。

開発途上国の方たちに戦後の日本の驚異的な復興の理由を尋ねられることがよくある。確かに彼らにしてみれば奇跡を見る思いだろう。今回もディスカッションでその質疑があった。誰かが代表的な回答の一つ「日本人の勤勉さ」を語るのを聞きながら、ふと私は昨夜の温泉は清潔なのかという質問を思い出していた。

私たちにとっての“清潔”も“勤勉”も彼らの認識するそれらとは異質のものなのだ。ひょっとすると彼らは「私たちだって勤勉なのに」と思っているかもしれない。どんなふうに勤勉なのかというところまで具体的に説明しなければ正しい答えは伝わらないのではないだろうか。「たとえば期限を切られたらどんなことをしてもそれまでに仕事を完了させるの、日本人は」と言うと、煮え切らなかった顔がパッと晴れて「ああ！ そうか！ そう言えばそうだ。うん。勤勉だ」と何度も彼らはうなずいた。

勤勉という単語を知っていることより生の日本の具体的な状況の知識とそれを伝える力が肝要だと痛感した。言葉は完璧ではない。危険な道具だ。国際交流・相互理解で単語に頼ることの落とし穴に気づかされた。「でる単」世代の私の目からウロ

コがポロツと落ちてガンジス川に流れていった。

素晴らしい人々との出会い

渡辺 浩
(教員)

何かの行事に出席しようとするときは、期待感を膨らませるものですが、今回の合宿セミナーへ参加する前の私は、言葉の違いや事前説明会に欠席したことなどから、少なからず不安感を抱いていました。

ところが、佐島マリーナで初めて会ったネパールの先生方とは、ずいぶん以前からの知り合いのような気がしましたし、日本の先生方とは久しぶりの友人に再会したようななんとも不思議な思いがしました。

この気持ちはなんだろう……。しかし、次第に進む交流のなかではそのことも忘れ、ネパールの先生方のさわやかな雰囲気や生活習慣の違いに触れ、意見を交換できたことが何よりうれしく貴重な体験として残っています。

東にした花火に火をつけ振り回した彼女。大胆すぎると思いながらも、その華やかさに見とれてしまったこと。

また、高山でヤクを放牧するときの歌で踊った彼女。あのエネルギーはどこからわくのかと驚きながらも、あまりの明るさにみんなで踊ったこと。

さらに、「私たちは文化と伝統と宗教に誇りを持ち、いつも希望と夢と情熱を抱いている」と話した彼女。耳にしたときは、心打たれ、思わず自分の生活を振り返ったこと。

そして、それらのすべてがとても新鮮に感じられたのです。

日々の忙しさに長いと感じていた合宿セミナーですが、終わりが近づくとつれ、エネルギーな彼女たちや日本の先生方、見事な対応をしてく

れたJICAやJICEの方、頼りがいのあった通訳の方々とは別れ難いと感じたのも事実です。わずか2泊3日。しかし、なんて素晴らしい人々と出会えたことでしょう。今の私の正直な気持ちです。

異なる生活習慣を超えて

寺坂 博
(国家公務員)

私は今まで青年招へい事業に参加したことがなく、観光で一度海外に行った以外はほとんど外国の青年と接したことがなかったので、始まるまではうまくコミュニケーションができるか不安でした。しかし、最初につたない英語と身振り手振りで何とかコミュニケーションを図ってみると、思ったより気持ちが通じたので気分が楽になりました。そしてその後は積極的に話せるようになり、分科会、交流の夕べやスポーツ交流など充実した合宿セミナーを過ごすことができました。

分科会では、ブルネイのイスラム教の戒律に基づいたさまざまな習慣や社会保障制度について話し合いました。事前に本などである程度知っていたのですが、直接話すことで本からは得られない生の姿を知ることができ、非常に親しみがわいてきました。交流の夕べでは両国の青年が一緒になって日本の盆踊り（炭坑節）を踊ったり、マレー語の歌を歌ったりして大いに盛り上がりました。特に炭坑節は振り付けに英語の説明を付けたため、ブルネイの青年も一緒に踊ることができ、評判は上々でした。一番楽しかったのは、最終日のスポーツ交流で、東南アジアで盛んなセパタクロ（足で行うバレーボールのようなもの）を教えてもらって一緒にプレーしたときは、時間を忘れて夢中になるほどでした。

以上のように素晴らしい経験をして多くの思い出を残すことができました。できればこの友情を

思い出だけに終わらせず、いつまでも保ち続けていきたいと思います。この合宿セミナーで、文化や生活習慣が違ってても互いを理解することは難しくないということを学ぶことができました。このことは私にとって今後大きな財産になることでしょう。

ミャンマーの風に触れて

野口 豊
(自営業)

まずはじめに、ミャンマーの青年との素晴らしい合宿セミナーに参加させていただいたことに深く感謝します。このセミナーは私の今後の生き方に大きな影響を与えていくことは間違いありません（もちろん良い意味での影響です）。

さて、今回の体験のなかで特に印象に残ったことを2点記載させていただきます。

まず一つめは、ミャンマーの方々を受け入れるにあたって、何かミャンマーの国に関係のあるパフォーマンスを一つでもできたらいいなと思っていましたら、友人の「ミャンマーの国の音楽が録音されているテープを一曲持っている」とのありがたい協力により、私はその曲をアコーディオンで弾くことを考えつきました。そして一夜漬けの練習の後、交流会の席で演奏したところ、突然ミャンマーの青年が直立不動で歌い出しました。あとから聞くと、その曲のタイトルは「ガバマチエ」。なんとミャンマーの国歌だったのである。国歌だったとは知らずに下手な演奏で恐縮していたが、ミャンマーの方々に「恐縮するなんて、とんでもない。ミャンマーの国歌をよく知っていたな！どこで覚えたんだ？」と驚嘆と感動、そして質問の嵐でした。言葉は上手に伝わらなくても、歌は人と人の心を繋げるとしみじみと思いました。

もうひとつはミャンマーの青年の日本語を習得

しようと努力する姿、そして人なつくくて、明るくて、さわぐのが大好きな人柄を見て、相手の国（ここでは日本）に対して、少しでも理解を深め、少しでも気持ちを開いて友好を深めようとする姿勢がこちら側に伝わってきたのでした。

まさに、外交的で明るいなかにも愛国心と素朴さを漂わしている人情味溢れる人々でした。アジアがますます近くなってきました。

興味深かったモンゴル人の生活習慣

高橋 一光
(公務員)

9月20～22日、横須賀の佐島マリーナホテルでのモンゴルの方々との合宿セミナーに参加した。私自身このセミナーに参加するのは今回で3回目であるが、世界にはさまざまな国があり、さまざまな生活習慣を営んでいるということを改めて感じさせられた。

まず最初にモンゴルでの酒の飲み方を説明すると、最初につがれた酒を薬指にひたし親指で輪を作ってピッピッと3度はじく。1回目は天に、2回目は地上に、3回目は生まれ故郷に捧げるといふ意味があるそうだ。彼らにとって酒は最高の飲み物であり、自分が信頼できる相手にしか勧めないとのことである。私も勧められて、光栄の至りであったが、実を言うと、私はビール1杯を飲んだだけで気持ち悪くなってしまふほどの下戸なのだ！ まことに申し訳ないが、ご辞退させていただきました。

モンゴルと言えば、やはり遊牧民のことを触れずにはおれない。今でもモンゴルでは人口の40%が遊牧民であり、ゲルと呼ばれるテントで昔ながらの生活を営んでいるとのことである。生活は完全に自給自足で、食べる物や住む家はもちろん、着る洋服や料理に使う道具まで自分たちで作るそ

うだ。ちなみに今回の参加者も遊牧民の子供として生まれ、かつては遊牧民の生活を営んでいたとのことである。

日本の生活に慣れきった私にとって、彼らの話はとても興味深いものであった。国際交流という難しいことのように思われるが、まずは外国の生活習慣に興味をもち、それを知ろうとすることが大切であるような気がする。私はもっとモンゴルのことが知りたいし、彼らとより円滑なコミュニケーションが図れるようになりたいと思う。いつかはまた彼らに会えることを祈念してこの報告を終えたい。

アフリカ発見!

井田 貴子
(公務員)

今回初めて合宿セミナーに参加させていただきましたが、予想以上に刺激的でした。というのも、私はアフリカについてあまりにも知らなかったからです。あの大陸の中はいくつもの国に分かれていて、いろんな人がいろんな生活を営んでいるのだという当たり前のことがやっと実感できました。

言語・文化・宗教と、人間の土台ともいふべき要素が違っていても、同じ人間だというだけで友達になれるとは素晴らしいことです。私自身はフ



フランス語がほとんど分からず、英語も思うように話せなかったの、話すことにとまどいを感じた面があったのですが、参加者のなかにはそんなことにこだわらず、思う存分好意を伝えようとしていた方もいて、勇気づけられました。

2日目の交流の夕べの盛り上がりは忘れられません。部屋いっぱい熱気が漂っていて、自分でもびっくりするくらい興奮していました。音楽やダンスを通してアフリカのエネルギーをひしひしと感じたのです。それはテレビや新聞で見る加工された情報とはまるで違った生のアフリカでした。

この世界で一生に出会える人はほんのわずかです。しかも地理的に限定されてしまいがちです。出会わなければお互いに存在も知らず、出会えないことを残念に思うこともありませんが、「見知らぬ国」が「友達の住む国」になったことは、確実に私の心の世界地図を広げてくれました。世界中のことを知ることは不可能ですが、幸運にも巡り合えた人々や文化に心を開けるようにしたいと思います。

たくさんの発見と思い出を与えてくれたセミナーを支えてくださった皆様にお礼を申し上げます。

感謝・感動・発見

中西 一美
(団体職員)

日本らしい風景である紅葉の秋、赤や黄、蛍光オレンジの葉や太陽の光に輝く湖に囲まれながらアフリカ青年との合宿が始まった。

なぜかアフリカという国にパワーを感じ、自分の中に潜在している“何か”を求めてプログラムに参加した。ルームメイトとの顔合わせから始まり、交流会、意見交換会、交流の夕べ、スポーツ交流と、どれもが刺激的な時間。

なかでも意見交換会では、先入観で作られた私

のアフリカとは違い、遠く野性的であるはずのアフリカが近く感じられ、文化や習慣の差もそう感じられなかった。

しかし、私の中で日本人との違いも発見した。“素直さ”だ。何事においても開放的で素直である彼らを強く感じ、素敵に思えた。“カルチャーショック”だろうか、「日本人って？ 私って素直？」そんな思いが浮上した。

そして交流の夕べでは、歌や踊りを体全体で楽しむ姿、日本人側の仮装に対する好奇心、書道等の伝統的なものに対する興味、どれを見ても真剣で輝く瞳をたくさん見ることができた。

日頃私たちは、この小さな日本で物質的、環境的に恵まれ、何ひとつ不自由なく暮らしているが、体全体で楽しみ、感動し、独自の何かを創り出す感性を持ち合わせているのだろうか？ そんな疑問や反省等を全身に浴びた合宿となった。英語力に乏しい私であったが、これからの人生に人間として必要な課題や忘れかけていた情熱を吸収した気がしている。

“一期一会”。この瞬間感じたことを大切に。そうすれば新しい何かを発見しようとしている心に到着する。アフリカ青年、日本人青年に感謝！ あ・り・が・と・う。

アジアの純真たち

御厨 太郎
(会社員)

「私は〇〇です」「私の名前は□□です」

片言の日本語で自分を紹介しているが、なぜか日本名。そして日本人と思われる人が海の向こうの名前を名乗っている。すでに誰がASEANの青年なのか、分からない状態になっている。合宿セミナーの行われる佐島行きバスは既に盛り上がっている。今回の参加者は皆髪が黒いから見分けに



く。その結果、2日目まで私をマレーシアからの青年と信じていた日本人女性もいた。

ASEAN側18人と日本側18人の青年を乗せたバスは海のきれいな佐島マリーナに向かっていた。

来日してから1週間、青年は日本の歴史、経済、文化を勉強してきたので、この3日間はそれに実際に触れて生きた材料から勉強するいいチャンスなのだ。同世代の日本人との交流ということで青年たちは少し開放的になりわくわくしているのが分かる。期待で胸いっぱいなのは日本側も同じだ。

初日はバレーボールでともに一つのボールを追いかけて、自然と言葉が生まれていく。夕食後、レクリエーションを通じてすっかり国の垣根はなくなっている。夜遅くまで各国のゲームを紹介し合ったり、楽しく過ごす。

2日目、ASEAN各国よりそれぞれの国の紹介があり、経済から観光まで紹介してくれる。午後は小グループに分かれ、各グループで興味のあるテーマについて議論をかわした。私たちのグループは男女交際の議論で大いに盛り上がる。結果としては宗教や文化等の違いこそあれ、考え方はそれほど違わないことが分かり非常に面白かった。これも同じアジアの人だからか？

夜は懇親会で各国の歌や踊りが披露され、日本側は阿波踊りを紹介、長いこと踊ってしまった。その後はやはり朝方まで各国のゲーム等をして、忘れられないひとときを一緒に過ごした。

あまりに短い3日間だったが、お互いに得たものは大きかったと思う。日本という国を少しでも身近に感じ、仲間という気持ちをもって帰国してくれていれば、と願う。ASEANの純真たちとは今後もずっと仲よくやっていきたいものだ。

国際交流とマルチメディア

福井 明央
(会社員)

「なあんだ、同じ人間ではないか」

ASEANの青年と会って、話してみても、最初に思ったのがこれだった。私は私の属する企業からの勧めがあって、このプログラムに参加していた。そのため、「真の国際交流とは何か?」、「アジアにおける経済・技術交流のあるべき姿は?」と、かなり堅苦しく考え、関連する本を読みあさり、集会所へ赴いた。今にして思えば、非常に肩肘をはっていたと思う。いざふたを開けてみれば、なんてことはない、同じような考え方をもつ同じ人間だった。違いと言えば、同じ言語を話さないことくらいである。この肩を並べることこそ、大切なスタートだったのかもしれない。

2泊3日の合宿セミナーのなかで、僕らは少ない時間を最大限有効に使うため、寝る間も惜しんで交流した。経済の話をしたり、結婚観を話し合ったり、ゲームをしたり。

もしこの交流が合宿セミナーだけで終わったら、あまりにももったいなさ過ぎる、というのは参加者全員の意見であると思う。どのようにして交流を継続していくか、ということを知ってほしい。簡単にテレビ電話とはいかないが、電子メールでの交流は手紙よりずっ

と手軽で、電話よりもずっと安いのだ。僕自身、メールを持っていたアジアの友人たちとは、電子メールによる交流がすでに始まっている。JICA、勤労厚生協会の皆様に感謝すると同時に、この交

流の場をこれからも継続し、良くしていくことで恩返しをしようと思っている。日本人を含めて、新たな友人皆に、ありがとうと言いたい。

4. ホストファミリーの思い出

初めてのホームステイ受け入れ

安田 肇善
(北海道)

今回、私共は初めてのホームステイ受け入れをいたしました。このお話の前に、昨年の阪神大震災のとき、神戸に出向き1週間ほどお手伝いさせていただきました。そして、私共に何かできることがないか考え、家族と話し合い、遠く離れた北海道ですが、被災した子供たちを受け入れようと思い、神戸市役所に連絡しその旨をお話しました。北海道ということもあり申し込みはありませんでしたが、今年の春に国際交流の話があり受け入れいたしました。

来日する日が近づくにつれ、「どういう方が来るのだろうか？ 言葉は通じるだろうか」など期待

と不安とが入りまじっておりました。

当日、いよいよご対面、インドネシア人で名前は「アサンタニィ」、23歳の男性。私たち夫婦は緊張してあがっていましたが、8歳の娘と5歳の息子は緊張どころかすぐに彼に近づき手をつなぎ「こんにちは。私の名前は……」など日本語で話しかけなついておりました。それを見ていて親の方が「言葉は、生活習慣は、食事は」といろいろ気を使っていたのが恥ずかしくなっていました。

素直な心で接することが一番大事なのだと子供たちに教えられました。

家でも彼の国、家族のことなどを聞いたり、子供たちとトランプやゲームで遊んだり、「サムライ、忍者」に会いに行ったり、小学校の運動会でビデオを撮ってもらったり、楽しい3日間でした。千歳にいる何日間かは肌寒い日が続き、彼の一番上手になった言葉は「とてもさむい」だったように思います。

お別れパーティーのとき、彼も私共も涙がとまりませんでした。これからも機会がありましたらホームステイの受け入れをしていきたいと思っております。



またマテットに会いたいね

上山 映子
(北海道)

5月末、フィリピンからの招へい青年、23歳の女性マテットさんが、うちに来ました。普通の日本の家庭がどんなものか分かっていたら、と思いき、普段通りの生活を体験していただきました。

初日、一家4人(長男4歳、長女2歳)で迎えに行き、帰りにスーパーで3日分の食料を買いました。「好きなものをかごに入れてくださいね」と言うと、彼女はグレープフルーツを入れました。心配していた食べ物のことですが、好んで日本のものを食べてくれました。えんどうのあんの和菓子が口に合ったようでした。私も主人も英語が話せるというにはほど遠いのですが、夕食後はお互いの国について話がはずみ、遅くまで起きていました。

2日目、知人宅でタンポポの草木染をするというので、見学に行きました。その後、フィリピンでは雪が降らないので、雪を見に行くことになり、私たちは日高山脈のふもとから山の中へ車を走らせました。2週間ほど前、季節はずれの雪が降ったのですが、もう見つけられそうにありませんでした。しかし、しばらく進むと、日陰に少しだけ雪が残っていたのです。彼女は雪と一緒に何枚も写真を撮り、たいへん喜びました。しばらくそこで、ビスケットとコーヒーのピクニックを楽しみました。

3日目は、私が勤務する中学校の運動会に出かけました。朝6時半からお弁当作りを一緒にしました。彼女は上手におにぎりを作ってくれました。運動会では、飛び入りで玉入れや二人三脚に出場してもらいました。この日は、同じ招へい青年のロウデスさんとホストファミリーも来られたので、

とてもにぎやかでした。短い期間でしたが、子供たちもすっかり彼女と仲よくなり、「またマテットに会いたいね」と言っています。

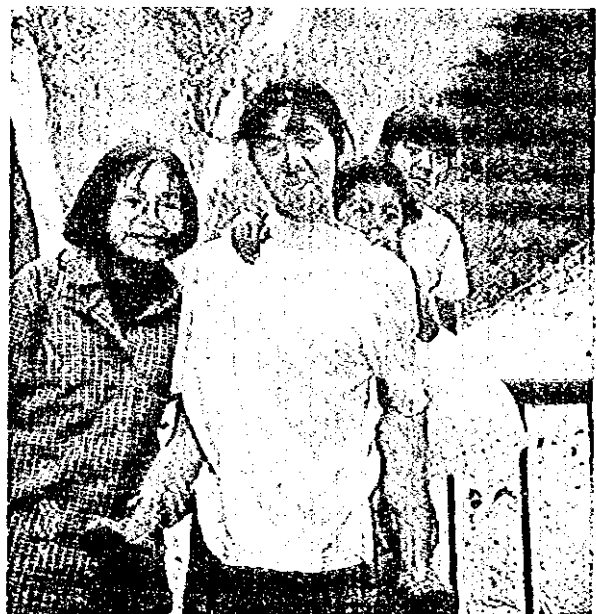
ホームステイ雑感

竹野 桂子
(富山県)

ホストファミリーになったのは初めてのことで、英語から離れて十数年、料理が苦手な私は不安でいっぱいでした。いつも使っていない頭をフル回転し、辞書をひきながらの会話で、なかなか意思が伝わらずもどかしい思いもしました。けれども辞書をお互いにひくのが楽しくなり、発音の違いや勘違いに大笑い。意思が通じたときはとてもうれしく感じました。

家では2階の子供部屋が空いているので、2階を使ってもらっていたのですが、6歳の娘と4歳の息子は朝起きてすぐに2階へお邪魔してカレンさんにくっついていました。

英語を話せなくても子供たちは、セーラームー



ンやウルトラマンの話をしたり、バドミントンをしたり、気負わずに楽しんで、仲良くなっていました。

また、ご近所の親しい人たちと焼肉やそうめんを一緒に食べながら、シンガポールと日本の国情の違いや、学校、車の話、おひな様の説明など、お互いに楽しい時間がもてたと思っています。

楽しい時間があつという間に過ぎてしまい、最後の夜、カレンさんをホテルに送っていったときは子供たちが、「なんで一緒に帰らないの?」と不満顔。翌朝2階へ行って「カレンさんがいない!」と半べそ。説明に困ってしまいました。なんだか家の中がガランとして、さみしくなりました。見送りに駅へ行ったときは、話をしたら涙が出そうで、あまり話しませんでした。たった2泊3日の滞在なのに、自分でも不思議なくらいです。

子供たちは時々「カレンさん何してるかなあ。もうこないの?」などと聞いてきます。「また会いたいね、シンガポールにいつか行こうね」と、話をしています。

たくさんの写真と思い出が残りました。

初めてのホストファミリー

菊地 陽子
(山形県)

今年初めて主人が町の国際交流協会に入会したところ、さっそくカンボディアの青年のホームステイの依頼がありました。

国の再建を担う若い学校の先生方のなかからわが家へは、高校で英語を教えているという26歳のインさんという青年が来られました。

主人も私も英語を流暢に話せるわけではないので、なんとか理解し合おうと辞書を片手にじっとインさんを見つめながらお話ししました。インさんは、とても礼儀正しく頭の良い方でした。また、



やさしく接してくださるので、恥ずかしがりやの娘などもすっかりなついて、どこにでもついて歩きました。

折悪しく次男が高熱を出してしまって、私はほとんど接待できず、世話好きな主人が、インさんの希望を聞きながらいろんな所を案内しました。「おしん」(カンボディアではやっているらしい)の生家の撮影に使われた家、初めてだというプール、そして主人の実家のサクランボ畑等に行きましたが、山裾に広がる田んぼを見ながら、「私たちの国ではまだ牛で耕し、手で田植えをします」と、寂しそうに言われるので、「私たちも小さい頃そうでした。日本も以前はそうだったんです。インさんの国も大丈夫ですよ。若い皆さんの力で良い国づくりをしてください」。そんな内容のことを片言の英語で精一杯伝えました。

ちょうどこの日は七夕の夜でしたので、皆で短冊に願い事を書き飾りつけました。インさんはカンボディア語で書いたので、なんと書いたのかわかりませんが、今も大切にしまってあります。

帰国前に東京から2度も電話をくださり、インさんにとっても、わが家にとっても、忘れられない絆が結ばれたホームステイでした。

プップカンマイ(また会いましょう)

久保 直子
(高知県)

私たちの家に来ることになったのは、ラオスから来たブンベン。彼は高校の英語の先生です。

彼が来たのは、7月5日から7日の3日間です。ちょうど七夕祭りの頃です。私たちは突然、日本文化の伝道者となったような気になって、ブンベンと一緒に七夕飾りを作りました。彼が真剣に一生懸命飾りを作るので、私たちも真剣になったのか、それとも私たちが身振り手振りで必死に伝えようとしたので彼もそうなったのか、それはよく分かりません。けれども出来上がったものは頑張ったかいあって美しい笹飾りとなりました。もちろん、願いも短冊にたくさん書きました。彼はラオスの言葉で、私たちは日本語で今後の友情が続くことを願いました。そのあと、笹飾りの前で記念撮影することになったときは、みんなが満足感に包まれていたように思います。

実は食事もみんなと一緒に作ったのですが、ブンベンは「家では料理をあまりしないから」などと言いながらも、かなり器用に包丁を使って料理を手伝ってくれました。

そうして、2泊3日はあっという間に終わってしまいました。

ブンベンは3日間で日本語もかなり覚えたとし、私もラオ語をほんの少し覚えることができました。それにラオスの歌も教えてもらいました。今、情報化社会と言われてさまざまな情報を得ることができるけれども、ブンベンに教えてもらった歌や言葉はそれとは違う別の価値をもっていると思います。もし、それは何?と思うのであれば是非ホームステイの受け入れを体験されることを望みます。

コープチャイ (ありがとう)。

南国の香りをありがとう

飯塚 美代子
(愛知県)

フィジーから、アセナカさんがみえました。南太平洋の国と聞いて、映画「南太平洋」やヘイエルダールの「コンティキ号探検記」を思い出しました。夢とロマンの想いが、現実のものとなりました。この機会に太平洋の国々がミクロネシア、メラネシア、ポリネシアの3つに大きく分けられていて、フィジーは、メラネシアに属していることなど、具体的に家族で話し合うようになりました。

通称ナサさんは、総理府行政官という堅いイメージとは違って、明るく、おしゃれで、頭脳明晰なヤングレディでした。日本生活文化体験ということで、わが家に2泊3日ホームステイされました。部屋、トイレ、風呂など生活面や食事等、ありのままの姿を見てもらいました。でも日本食ばかりでは、きっと苦勞しているにちがいないと察して、希望を聞いてみたら、マクドナルドハンバーガーがフィジーに今年開店したばかりで、気に入っているので、近所にあったら食べに行きたいと言うので直行しました。若い彼女は、チーズバーガーとダブルバーガーをおいしそうに口にしていました。

週末は、明治時代の建物を文化財として集めて保存してある明治村へ、副団長のブラウンさんを誘って遊びに行きました。120年前の蒸気機関車に乗ったり、梅雨の晴れ間のさわやかな一日、村内を散策しました。

彼女はその後、近隣の市を訪問したり、合宿セミナーに参加し、若い世代と交流しましたが、銭湯を体験したり、感激していました。愛知での滞在は、異文化体験を通して最高に有意義であったと語ってくれました。フィジーの社会的伝統や家

族を大切にしているナサさん。日本の生活様式を受け入れてくださり、うれしく思いました。

礼儀正しい青年

大城 貞俊
(沖縄県)

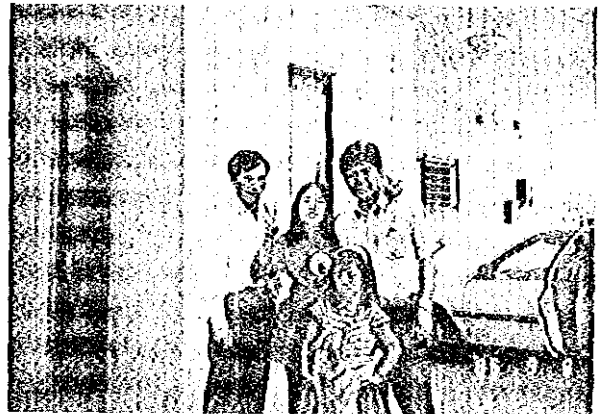
ヴィエトナム青年のスアン・タインさんをわが家に迎えたのは、9月6日だった。2泊3日の滞在であったが、名残惜しかった。

タインさんは、日本語が話せないということだったが、小学生の2人の娘は、すぐに馴染んだ。身振り手振りで、日本語を教えるは、大声で笑い合った。庭の小さな菜園や花鉢に水をかけていると、手伝ってくれた。ゴーヤーやピーマンは、ヴィエトナムにもあること、花の名前や、食べられる草花まで、口に入れて教えてくれた。

本島北部の本部町にある海洋博公園にも行った。ジェットコースターに乗り、水族館を見た。今まで見たなかで、最も大きな水族館だと驚いていた「オキちゃんショー」と名付けられたイルカの芸には、童顔を見せて拍手をしていた。夕暮れ時の北谷海岸では、水平線に落ちる夕日を見ながら、波打ち際で遊んだ。子供たちのために一生懸命に蟹を捕まえようとして、大きな蟹に指を咬まれたタインさんを皆で笑って健闘をたたえた。

タインさんは、とても礼儀正しい青年だった。食事が終わると、空になった器を流し場まで片付け、自動車に乗るときは、ドアを開け、家族の皆が乗り終わったところで自分が乗った。しかし、卑屈な態度は微塵も感じられなかった。自国の歴史に誇りを感じ、未来へ自信を有しているように思われた。

「HUUNGH (友情)」「HOA BINH (平和)」というヴィエトナム語を教えてもらった。タインさんの家族の写真を見ながら、子供たちは大きく



なったらヴィエトナムに行きたいと言った。さよならの握手をしたとき、強い友情で結ばれた平和が、世界のすべての国々に訪れることを願わずにはいられなかった。

カレーの国からやって来た隣人

安藤 修一
(北海道)

9月14日から16日まで2泊3日の日程で、パングラデシュ公務員グループのモフィズールさんがわが家に来ました。

彼が家に着いたとき、ちょっとしたハプニングがありました。わが家ではネコを飼っていますが、彼を見るなりネコが急に飛びかかったのです。こんなことは今までなかったので、やむなく子供部屋に3日間隔離しましたが、ある日「アンドさん、アンドさん」と呼ぶ声があるので行ってみると、なんとネコが彼をジーッと睨んでいるではありませんか。そのとき、彼は金縛り状態になっており、思わず、失笑してしまいました。モフィズールさん、ごめんなさい。

とても印象深かったことは、友人の家で受け入れをしたフェルドウスさんが私たちを招き、自慢のカレーをご馳走してくれたことです。本場の味を楽しめて私にとってはいい経験となりました。

彼と3日間過ごしたなかで、感心させられることがたくさんありました。日本から何かを学ぼうという姿勢、それと私たち以上に日本という国を知っていたことにはたいへん驚きました。プログラムのなかで広島市の視察の話をした折、原爆の悲劇を彼の国の子供たちは知っているとのこと、逆にアジアの隣人であるバングラデシュのことを私たちはどれだけ知っているだろうか、と深く考えさせられました。

最初、受け入れに当たり、イスラム教の国の人々は宗教上いろいろな制約が伴い大変だというイメージがあったことも事実ですが、私や家族にとって一生忘れられない素晴らしい経験ができました。モフィズールさん、楽しい思い出をありがとう。

JICAの皆さん、このような機会を与えていただきありがとうございます。

アミーザさんを迎えて

西山 正廣
(佐賀県)

インド洋に星のように散らばる島々からなるモルディヴからお客様を迎え、2日間わが家に泊まっていたいただきました。小柄でいつも笑顔のその人は、同国最南端の島の小学校で教える先生です。3歳と1歳の2人の息子さんをもつ、やさしさと厳しさを兼ね備えた母親であり、遠く離れた首都マレ島で働くご主人のことをいつも気遣う良き妻でもあります。

私共夫婦は子供たちが巣立ち二人暮らしなので、おかげでアミーザさんとゆっくりお話をしたり見学に出かけたりすることができました。彼女との会話で一番印象に残っているのは、モルディヴでは離婚が非常に多いということです。男性の方から、「きみを嫌いになったから別れる」と言われれば、女性はそれに従わざるを得ない、しかも慰謝

料もないというケースが多いそうです。いかにイスラム教の社会とは言え、女性の人権がこのように無視されるのは気の毒でなりません。

ホームステイはわずか2日でしたが、その2日に私たちは市内のスーパーに買い物に出かけてみました。そしてその翌朝、アミーザさんがモルディヴ流の朝食をつくってくれました。インドの「ナン」やスリ・ランカの「アッパー」に似たパンケーキを薄くしたようなそれは美味で、私たちはそれでカレーやピクルスをくるんで右手の指を使って食べました。「ロシ」というそうです。

その食後にデザートとしてブドウを出すと、彼女は初めて見た、と言って珍しがりました。「これは、つるになるものですよ」と言うと、それをぜひ見たいと彼女が言いましたので、早速知人で果樹園を営んでいる人をお願いし、彼女の要望に答えることができました。短い交流ではありましたが、楽しくかつ有意義なお付き合いを体験することができ喜んでいきます。今度はいつかモルディヴを訪れたいものです。

アジェイさんの思い出

井上 恭代
(岐阜県)

わが家にお迎えしたアジェイさんは、インドの高校の物理の先生で、とても響きの良い声で快活に話をされる男性でした。

最初の夕食の後で、「食事はいつも妻が作るが、私もたまにはミルクティーを作るよ」と言って、インド式ティーを作ってくれました。みんなで甘いティーを飲みながら話をしていると、彼は、「家族の一員になったような気がする」と言ってほほえみ、私もほっとしました。

高校3年の娘は物理が好きなので、アジェイさんの来宅を楽しみにしていました。しかし、盲腸



の手術を受け入院中でした。「まず第一に、お見舞いに行きたい」というアジェイさんの希望で、病院へ行きました。問題集の中の定理や公式を通じていろいろ話をし、娘も大満足でした。彼は、「明日もきっと来るからね」と言って、娘が寂しがらないように気遣ってくれました。

2日目の夜、岐阜市の夜景を見に行ったとき、インドではいつも夕食後、家族と散歩をするということを知り、近くの長良公園へ行きゆったりとした時を過ごしました。アジェイさんの家族を思う心、共に過ごす時を大切に作る心のゆとりを強く感じました。

3日目に、岐阜城へ行った帰り道で、「ホームステイする前には、不安があったけれど、一緒に暮らしてみて、人間はみんな同じなんだと分かった。ありがとう」とお礼を言われたとき、私も同じことを思っていたので、心と心のつながりを感じ、うれしくなりました。

県主催のお別れ会で、アジェイさんはインドの歌をソロで披露してくれました。素晴らしい歌声でした。楽しい思い出を残してくれたアジェイさんと、このプログラムを計画してくれた方々に感謝いたします。

初めてのホストファミリー体験

岸 じゅん
(新潟県)

先日、わが家にネパールからの美しいお客様、ビバさんがいらっしゃいました。うちにとっては、初めてのホストファミリー体験、少々緊張しましたが、気さくな彼女に助けられ、とてもいい3日間を過ごせたと思います。

私にとって楽しかったのは、一緒に台所に立ち、手を動かしながら、あれこれとおしゃべりしたこと。女同士ということで、おしゃべりのこと、料理のこと、お互いの夫や子供のこと、etc。話の種はつきず、国は違っても同じ人間なんだなあ、と思いました。また、ビバさんお手製のネパールのカレーを、家族4人、手で食べたのも楽しい経験でした（お味のほうは、実に不思議な味わいで、夫と私に、うーん、世界は広い、と思わせました）。

小学生の娘たち2人は、ゲームをしたのが楽しかったようです。トランプで、「神経衰弱」を教えたり、お返しにネパールのトランプ占いやおぼじきのような遊びを教えてもらったり。言葉は通じないのに気持ちはよく通じ、キャッキョッと笑いころげておりました。サリーを着せてもらったのもうれしいことで、下の娘はホテルでのさよならパーティーにもサリー姿で参加。もう大ニコニコでした。

地域の子育て仲間である親子サークルにお連れして、互いの国の昔ながらの手遊びや歌を紹介し合ったり、県立の自然科学館でロボット操作やプラネタリウムを楽しんでいただいたりと（ビバさんは理科の先生なのです）、外出もしましたが、日本の普通の家庭の様子を見てもらったのが一番よかったように思えます。「あなた方に会えて、本当によかった」と繰り返し言ってくださったビバさんのお気持ちが何よりうれしく、いつまでもお元

気でと願っている私たち家族です。

案ずるより産むが易し

遠藤 俊子
(山梨県)

パキスタンの医療チームのホームステイの話は、2カ月ほど前に山梨県看護協会を通じて依頼がありました。そのときには、家の掃除をし、好みの料理を覚え、挨拶程度のウルドゥ語も思っておりましたが、気がつけば、「明日はいらっしゃる」と大あわてで、結局ありのままでした。わが家は猫2匹が8月に相次いで出産となり、もらい手のないままに7匹の猫屋敷となり、こうなれば「猫の大好きな方に当たりますように」と神頼み状態でした。

ところが、お会いしてからこんな心配はいらないことが一夜にして分かりました。私の場合は、共通項の「看護をしていること」が話題の中心となりましたが、そこから話がはずみ、家庭、文化と広がり、何か共通の話題は大切に、看護協会が引き受ける意味もありました。しかし、夫や子供も楽しく交流しており、つまり「この人を知りたい」という気持ちが国や文化を超えて仲間になれるということを身をもって実感いたしました。

ホームステイ2日目には、甲府にある影絵美術館で偶然になんと5組もの家庭が鉢合わせいたしました。このときの招へい青年の皆様の間では、言葉では言い表せない表情でしたし、各家庭の方々も「どう？」などと報告し合い、あと1カ所は全員で行くプランになり、妙に楽しくなりました。

2泊3日過ごしての感想は、「案ずるより産むが易し」です。日頃から人間関係を難しく考えすぎの私たち、久々に心から知りたいと思う気持ちが大切であると改めて感じさせていただきました。

パキスタンだけでなく、日本の男性も家事をあまりしませんが、このときとばかり張り切っていた夫、英語をもっと学びたいと思った子供、いろいろな収穫がありました。ありがとう。「ドバラ・ミレイ・ゲイ」(またお会いしましょう)。

初めてホームステイを受け入れて

岩田 美穂子
(石川県)

知り合いに2泊3日のホームステイを受け入れないかと誘われて、初めてホストファミリーになりました。

英語は特別できるわけではないので、やはり言葉が一番の心配でした。海外旅行の経験は何度かありますが、そのときはどうにかなっていたといっても観光地でのことです。さてちゃんとコミュニケーションをとれるかしらと不安でした。

日常生活の面は、どうにかなりましたが、国のことや相手の考えなどを聞くのはやはり難しく、結局、英語の話せる日本人の友人を呼ぶことにしました。おかげで、少しはコミュニケーションらしきものをとることができました。

次に心配だったのは食事です。イスラム教徒ということで、制限が多く、はたしてお口に合うものを出せるのかと不安でしたが、やはり手につかないものが多く、がっかり。

1日目の夕食は、焼きそば(シーフード入り)、豆腐と菜っばのみそ汁、あさりの酒蒸し、栗ごはん。ちゃんと食べたのは焼きそばとあさりの酒蒸し。あさりの酒蒸しはあとで気がついたのですが、お酒を使ってしまった。しかしそれを一番喜んで食べてくれました。

栗ごはん、みそ汁はだめ。うちの子供にあげていました。朝ごはんは、彼がもってきたインスタントのカレーメードル。ごはんには手をつけませ

んでした。

昼はインド料理のお店へ。気に入っている様子でした。

夕食は彼の手づくり料理をごちそうしてくれました。ブルネイから自分で持って来た材料と近江町市場で買った野菜、家の冷蔵庫に入っていたもので作り、すごく満足して食べていました。「なんだ、やっぱり自分の好きなもの食べたいんだ」と少しがっかりしました。肉もハラールミートのビーフジャーキーやかんづめを使って作るの、「肉は好きなんだ」と分かりました。日本ではなかなか手に入らないし、肉が食べたかったら自分で用意してきて作るしかないんだなと思いました。私たちだって外国で食べ慣れないものは苦手です。

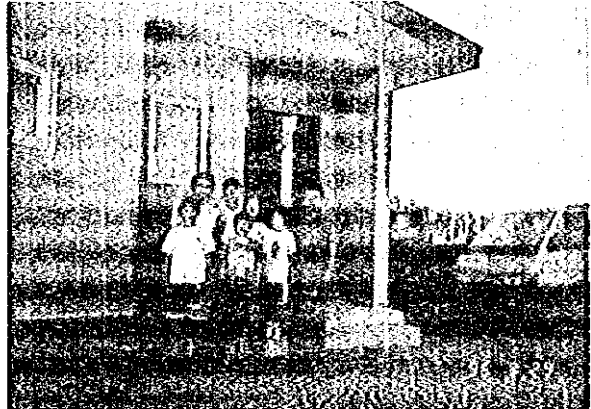
まあ、そういう具合で3日目ぐらいにやっと好みみたいなものが分かったのですが。

おふろは、朝にシャワーを浴びる習慣らしく、2日ともシャワーを浴びていました。もちろん夜もおふろをわかしていたのですが、洗ってはいないようでした。

あれこれとまどうこともありました。国が違えば習慣も違うし、また個人差があるのですからいちいち気にしてはいられませんね。

最後のボウリング大会を一番喜んでいたような気がします。友達と一緒にのときがやはりいきいきとしていました。マレー語を話せるのが一番楽しいでしょうね。

たった2泊3日のホームステイでしたが、やはり少々疲れしました。でもまた機会があればやってみたいです。



Mr.ウーソウチットゥンとの出会い

田村 くに子
(北海道)

新年早々わが家にホームステイの依頼が飛び込んできました。予備知識もあまりないままに、ミャンマーのウーソウチットゥンさんを受け入れました。私たち家族は特別なことはせず、いつもと同じ生活をしようと思っていても、どこかぎこちなく、また英会話もあまりできない私たちは、ガイドブックと辞書を手放せない3日間でした。

ソウチットゥンさん（私たちは彼のことをそう呼びました）もきつと緊張の連続だったでしょう。日本にいる間で一番疲れた3日間を過ごさしてしまったかもしれません。

9月27日、秋晴れの夕方ウキウキしながら彼を迎えに行きました。なぜならこの日は彼と私の誕生日だったのです。いつもは簡単に済ませている誕生日でしたが今年は特別です。本当にささやかなパーティーでしたのに彼はお礼にと大切なカレン族の衣装をプレゼントしてくださいました。とても美しいもので居間に飾ってあります。私たちは彼のいろいろなことを知ろう見ようとする姿に感心しました。酪農の仕事にも興味をもったようで、朝晩の搾乳作業、昼間の収穫作業を熱心に見ていました。電池で動くおもちゃやソーラーパネ

ルで遊ぶ子供たちを見て、「とてもよいシステムだ、けれどミャンマーの子供たちにはとてもできない遊びだ」と言った彼の言葉は忘れられません。

彼はミャンマーに帰り生徒たちにどんなふうに関わりたいのかを話すのでしょうか？ 彼の教え子の1人でも日本に来たいと思ってくれたらいいと思います。お別れパーティーのとき、子供たちには「勉強頑張れ」、私たちには感謝の言葉とミャンマーに来てほしい、と言って帰って行きました。遠い国ミャンマーが身近な国になり、行ってみたい国になりました。彼から私たちは言葉以上に温かい心してもらいました。

ありがとう、Mr.ウーソウチットウン。

草原を渡る風のように

田中 節子
(石川県)

モンゴルの公務員10人が、いよいよ金沢でホームステイをする日がやってきました。

対面式に臨んだ私は、言葉の面で多少不安がありました。でも過去7年間9カ国から24人の方々のホストをさせていただいた経験から、言葉は通じなくてもなんとかなるさ！ と楽観していました。でも私は思い違いをしていたのです。英語は少しだけ……と言っても学校で習っていました。また、アジアの人とは漢字で分かり合えるといった具合でした。ですから今度ばかりは正直言って困惑しました。それでもお互いモンゴル語と日本語の本を見ながら会話をしましたが、一方通行ですぐとぎれてしまいました。ジェスチャーで通じないときは、失礼かなと思いましたが、彼の手を引いて意思の疎通を図りました。2泊3日の滞在でしたが、2日目は市内散策をし、3日目は「金沢史跡コンサート」に出かけました。このコンサートは市民がボランティアスタッフとして大勢参

加して、私もお手伝いをさせていただいています。Tsogooさんにもあらかじめ通訳を通して参加の確認を取ってあったので、一緒にボランティアをしていただきました。彼は受付係としてプログラムやパンフレット折り、テーブル運び等を要領よく手伝ってくださいました。一緒に働いた周囲の人たちとも交流ができてよかったと思っています。

今回ホストファミリーをして、言葉の必要性を痛感していますが、それ以前に「基本は人間として」ということをいつも心に持っていたと思っています。モンゴルの草原を渡る風のようにわが家を後にした彼は、普段着のままの私たちの暮らしをどう感じたのでしょうか。58億人分の1の出会いを大切にしたいと思った3日間でした。

アフリカ青年から学んだこと

田中 美穂
(徳島県)

わが家にやって来たのはエチオピアの経済学者。最初はエリートの頭の固そうな人だろうと予想していましたが、会ってビックリ。ユーモアたっぷり、笑顔の似合う好青年でした。彼と出会ってたくさんのことを学びました。

ひとつは「何事にも前向きに生きる」。ハードスケジュールで疲れているだろうと思い、「大丈夫？」と尋ねると、「今、本当に楽しいので疲れているひまがないよ」と笑って答えてくれます。

私はすぐ「疲れた」と言うくせがあると言うと、「これからは、あ〜疲れ……てないを口ぐせにしたらどう」と言ってくれ、今実行中です。

2つ目は、「失敗は成功のもと」。私の拙い英語を詫言ると、まず、ほめてくれ（アフリカ人はとてもほめ上手）「失敗しないようにとパーフェクトをめざすより、失敗しても次は成功すると勇気を

出す気持ちの方が大切」と言ってくれました。

3つ目は「英語を学ぶ意味」です。本来の目的、コミュニケーションの手段ということのを忘れ、受験のためにと学ぶ学生が多いと思います。彼にそのことを言うと、「英語はコミュニケーションに重要。またコミュニケーションするには（社会、文化、理科、音楽等）たくさんの知識を身につけなければいけない」と言ってくれました。

最後に、一番学んだことは彼の人格＝アフリカ人の個性です。彼も日本に来るまで日本人は（個人主義）と思っていたようでした。

アフリカ人も日本人もopen-mindで明るく親切で勤勉という共通点があると分かりました。

彼は日本語、私はアムハラ語と一生懸命お互いの言語を学んだり、お互いの文化を教え合ったり、異文化交流をして初めてお互いの良さが分かるとしみじみ思いました。

たくさんの思い出と機会を与えてくださったスタッフの皆様、本当に本当に感謝しています。ありがとうございました。

ホームステイについて

小林 栄思
(新潟県)

ギニア・ビサオ??? アフリカのどこにあるのかも知らないし、名前も聞いたこともない。ホームステイを受け入れるのはいいが、当初は相手の国の名すら知りませんでした。日本の普通の生活を味わってもらおう。それに、文化の日と日曜

が重なった日程で、子供の幼稚園の文化祭や、男の子たちの部活動等、家族みんながあわただしい日々でのホームステイでしたので、特別なメニューもほとんどなしで過ごしました。

一番心配していた子供たちとのコミュニケーションは、トゥレさんの子供好きな性格で、全く心配なし。それどころか、「のぞみ、のぞみ」と、一番の仲良しになっていました。

幼稚園の文化祭、日本海タワーから新潟の街を眺めたり、ネクスト界限や図書館周辺の散歩、自然科学博物館へ行ったこと等、よい思い出をつくってくれたらと思います。家では折紙をしましたので、後日、文化研修のときに役に立ったようです。

近所のまわる寿司へも出かけて、わさびも体験しました。お勘定の際、どうして料金がすぐ分かるのか、不思議だったようですが……。

日曜の夜は「寅さん」を一緒にテレビで見ましたが、言葉が分からなくても、出演者の表情のみで、日本人と同じ瞬間に笑いが出るのには私もびっくり。トゥレさんはひょっとして日本語が分かるのではないかと思うほどでした。

短い滞在でしたが、家族全員、トゥレさんを大好きになりました。そして、アフリカの未知の国からの素晴らしいメッセージを受け入れて、家族にとっても、本当によい思い出となりました。そのほか、アフリカの国の問題、特に子供たちをとりまく問題については興味深く聞きました。これを機会に、アフリカについて、もっとよく知りたいと思うようになりましたし、これからもトゥレさんとは友情を深めたいと思います。

